沖縄特攻作戦で活躍した日本陸軍機

陸軍一式戦闘機「隼」二型乙

陸軍三式戦闘機「飛燕」

陸軍三式戦闘機「飛燕」

沖縄本島摩南・摩文仁岳の地下壕で、米第7歩兵師団により発見された第32軍司令官・牛島満中将と長勇中将（手前）の遺体。

疑問点の多い牛島、長両将軍の自決現場写真

この写真は昭和三十二年刊光文社発行の写真記録「太平洋戦争」で初公開、その後数誌に再録され話題を集めたものだが、自決現場、屍体の状況などにかなりの疑問があり、果して両将軍かどうか一概に信じ難いと云うのが当時の関係者の見方のようだ。

本誌はこの点について、元沖縄軍高級参謀八原博通、軍司令部と最後迄行動を共にし奇跡的に生還した元沖縄憲兵隊副官萩之内清（鹿児島県日置郡市来町に現存）の両氏に照会、真相を確かめたが、両氏の所見でも判定し難いとのことだった。以下萩之内氏の所見を中心に考察を進めることにする。

一、両将軍の自決現場は海に面した洞窟開口部近くの通路上で、敷物には布団が用いられた。切腹した後は傷口を繃帯で巻き、開口部から五十米位隔てた斜面に埋葬したがその頃は既に米軍の馬乗り攻撃を受け、弾丸雨霰の如く、到底土を掘る間もないので止むなく窪地に横たえ、敵に発見されぬよう石塊で覆った。

一、両将軍の屍体は数日後米兵の手で掘り出されたが、牛島将軍は通常礼装、長中将は日本式肌着、白手袋をはめ、かすかに香水の匂が漂っていた。

一、両将軍の介錯をつとめた副官坂口勝大尉（熊本県出身、特別志願将校）は萩之内憲兵大尉とは同年兵、那覇憲兵分隊長在任当時から親交があり、介錯の方法についても相談を受けた。坂口大尉は戸山学校出身の剣道五段の練士、研究の末、牛島将軍の首級は敵の手に渡るのを阻止するため斬り落して専属副官吉野中尉が処理

する。長中将は七分斬りにする、などのことを決めその通り実行した。吉野副官は牛島将軍の首級を抱えて壕外へ飛出したまま消息不明（直撃弾を受け戦死？）。
一、米軍は両将軍の屍体を発見収容後、軍装品、着衣などを証拠品として本国へ送付したものと思われる。」
一、両将軍の自決後高級副官葛野隆一中佐、坂口大尉、通信隊の大尉、軍医中尉の四名が入口付近で枕を並べて整然と服毒自殺を遂げた。
（結論）以上の諸点から考察して(1)自決現場ではない。米軍の手で収容、移動後のものと思われる。(2)牛島将軍は別として手前の白シャツ姿は雄偉な体格から推して長中将と推定される（軍袴に多少疑問）(3)戦後の米軍機関紙星条旗に一首なし牛島大将の屍体発見　と報ぜられたことなどに徴しても首級が発見されたとは信じられない。
従ってこの写真にはかなりの疑問点がある
なお両将軍の自決現場を知悉している将兵は副官部勤務者のみで、沖縄出身の当間軍曹もその一人で戦後も健在のようだが最近消息を聞いていない。

沖縄憲兵制度の沿革

憲兵は主として陸海軍大臣の指揮を受けて軍人軍属およびこれに関係する一般民間人の犯罪取締りを主要任務とし、監軍護法を旨とする警察機関で、戦時中は反軍運動、防諜、スパイなどの取締り、捕虜の管理に重点が置かれ、強大な権力を揮った。終戦時の兵力は内地、野戦合わせて三萬余名と云われる。
沖縄の憲兵制度の概要は次の通りである。
(1)昭和九年四月二日　熊本隊鹿児島分隊那覇分遣隊設置
昭和十一年八月一日　那覇分隊に昇格
昭和十九年九月六日　沖縄憲兵隊創設
(2)沖縄憲兵隊の編成並に人事
（イ）本部　隊長　憲大佐　美座時成（28）
副官　憲中尉　萩之内清
警務　憲中尉　平川寿人
主計　主中尉　竹村康一
（註）特高関係は警務主任の兼任）
（ロ）那覇分隊長　憲少佐　山本充吉
名護分遣隊
（ハ）宮古島分隊　憲大尉　武田茂一
石垣島分遣隊
（ニ）徳之島分隊
古仁屋分遣隊
右隊長以下兵力八十五名、軍属二十五名
(3)隊長の更迭
昭和二十年三月美座隊長は東海憲兵隊司令官（少将）に転出、後任には三月十七日朝鮮の威興憲兵隊長諏訪興平中佐が発令されたが戦斗開始で赴任不能となり、那覇分隊長山本少佐が隊長代理を勤めた。
十九年十月十日の空襲で本部及び那覇分隊の建物は焼失、本部は真玉橋の農家を経て二十年一月始め首里の市立図書館へ移転、又那覇分隊は松尾郊外の製糖工場から、十年一月始め首里の力トリック教会へ移転した。
戦斗激化に伴い憲兵隊も戦列に加わり、山本少佐は南部の知念で自決、その他の幹部将校、下士官の殆んどが戦死した。軍司令部と行動を共にした萩之内中尉ほか数名の下士官は生還した。

宮古島憲兵分隊長武田茂一大尉（秋田県出身）

宮古島野原越の師団司令部前に於て（昭和20年10月頃）その右隣桜井、足立大尉

多数の将兵が自決した摩文仁の第32軍洞窟司令部

洞窟司令部では牛島軍司令官、長参謀長を始め軍経理部長佐藤三代治主計大佐、高級副官葛野隆一中佐以下多数の将兵が自決した。（写真は洞窟内部を調べる米兵）

将校五百名を含め
日本軍凡そ八千名が捕虜に

白旗を掲げて投降する日本兵

日本軍ではかねてから「生きて虜囚の辱めを受ける勿れ」として如何なる戦況下に於ても敵への投降は一切認めない方針で将兵を律してきたが、太平洋戦争を通じて聯合軍の捕虜となり、戦後生還した数はかなりに上っている。厚生省ではこれらの将兵を特殊帰還者として扱っているが、終戦後の投降は大命に基くものとして軍律には問われなかったようである。

今次の沖縄戦では日米合わせて二十萬人以上（非戦斗員を含む）の戦歿者を出しているが、この反面将兵の捕虜が七千五百名（一資料によると七、八四一名）を算えたのは注目に値する。このうちには戦後降伏命令によって投降した将兵も相当の数に上ると推定されるが、戦斗中、米軍の投降勧告に応じて捕虜になったものも少くないようである。而も投降者のうち将校が五百名、下士官千五百名と全体の三分の一弱を占めていることは鉄の規律を誇った無敵皇軍の崩壊を物語るものであろう。

因みに沖縄戦に参加、生還した主要陸海軍将校は大体次の通りである。（カッコ内は陸士期別）

洞窟陣地を出て身体検査を受ける日本兵

第三十二軍高級参謀
大佐　八原博通（35）　鎌倉で現存
独立混成第四十四旅団第二歩兵隊長
大佐　宇土武彦（27）　戦後病死
歩兵第三十二聯隊長
大佐　北郷格郎（28）　都城市で現存
第三十二軍航空情報所長
大佐　塚本保次（31）　横浜市で現存

第三十二軍参謀（航空）
中佐　神　直道（44）　軍命により戦闘中、脱出、六月十五日東京着。
第六十二師団輜重隊長
少佐　杉本秀義（少候10）
独立臼砲第一聯隊指揮班長
少佐　久保二郎（少候17）
野砲兵第四十二聯隊本部付
少佐　二位　顕
海上挺進第三戦隊長

首里防衛陣地を攻撃する火炎放射戦車　（20年5月中旬）

少佐　赤松嘉次（53）
海上挺進第一戦隊長
少佐　梅沢　裕（52）
第三十二軍司令部付
少佐　西野弘二（52）
海軍陸戦隊参謀
中佐　中尾八郎（？）
海上挺進第二戦隊長　少佐　野田義彦（52）

この外大隊長クラスも若干居るが省略する。猶、これらの人々の大部分は終戦後命令により投降とされている。

米軍の猛砲撃で破壊しつくされた首里近郊の日本軍陣地

射撃訓練中の日本軍野戦重砲

96式榴弾砲、太平洋戦争を通じ日本軍砲兵戦力の骨幹となった火砲で全備重量五トン、最大射程一〇、〇〇〇米、命中精度良く機動に便利なのが特徴とされ、沖縄戦線には36門が配備された。

戦車第27聯隊将校団（右から6人目聯隊長村上乙中佐）

（昭和19年1月満洲勃利に於て）

沖縄作戦参加主要戦闘兵団概況

第二十四師団

昭和十四年十月第十一師団より歩兵第二十二聯隊、第八師団より歩兵第三十二聯隊を抽出、歩兵第八十九聯隊（満洲の第二国境守備隊を改編）の三コ聯隊を基幹に特科部隊を加えて編成した新設師団で沖縄転進当時は歩兵聯隊は二コ大隊、砲兵聯隊二コ大隊の編制だったが、のち歩兵、砲兵各三コ大隊編制に復した。

沖縄作戦初期は嘉手納一帯に布陣していたが、第九師団の台湾転進に伴う配備変更により島尻南部地区に移動、二十年五月四日の軍主力の攻勢作戦に際しては主力兵団として奮戦した。軍主力の首里撤退後は島尻地区で最後の死闘を展開、六月三十日雨宮師団長、木谷参謀長らの自決（宇江城司令部壕）を以て師団の歴史を閉じた。吉田、金山ら各聯隊長クラスの幹部も相前後して自決したが、北郷大佐の率いる歩兵第三十二聯隊の一部は国吉の壕で終戦後も引続き抵抗を続け、八月二十九日米軍に降伏した。

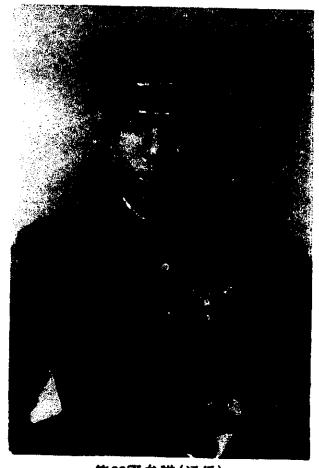
師団長及び師団司令部の主要陣容は次の通り。

師団長　中将　雨宮　巽（26）
参謀長　大佐　木谷美雄（34）
（前参謀長鈴木大佐は沖縄転進前転出）
作戦主任参謀　少佐　苗代正治（46）

第32軍参謀（情報）　薬丸兼教少佐（48）

鹿児島県出身、大正5年生、都城歩兵第23聯隊中隊長などを経て第32軍参謀、示現流の達人、沖縄戦では勇猛果敢な戦陣行動で有名、20年6月島尻戦線で戦死（写真は19年10月軍司令部構内に於て）

後方主任参謀　少佐　杉森　貢（49）
参謀部付　大尉　古東照典（54）
高級副官　少佐　山口貞治（少18）
（前高級副官高杉［？］中佐は沖縄転進前転出）
次級副官　大尉　国永　登
専属副官　中尉　久留　敦（特志18）
兵器部長　少佐　小野芳槌（少10）
兵器部高級部員　大尉　田原勇助
兵器部付　少佐　赤倉徳雄
経理部長　主少佐　小沢辰二
経理部高級部員　主少佐　黒沢幸助
部員（経理課長）　主大尉　田中　俊
部員（野戦倉庫長）　主大尉　今井繁光
軍医部長（代理）　医少佐　都留　完
軍医部高級部員　医少佐　木谷民輝
部員　医大尉　根本正直
部員　医大尉　千布　保
獣医部長　獣中佐　石垣誠一
部員　獣中尉　伊藤長二郎
通信班長（参謀部付）大尉　川尻　栄（特8）
歩兵聯隊は聯隊本部、歩兵三コ大隊、歩兵砲中隊一、連射砲中隊一、通信



第32軍参謀（通信）
三宅忠雄少佐（48）

愛媛県出身、20年6月頃具志川村前川部落で戦死。

中隊一より成り人員二、八七六名。野砲兵聯隊は聯隊本部、砲兵大隊三、聯隊段列一より成り、人員二、二三四名、装備は95式野砲八門、91式十サンチ榴弾砲十六門、四年式十五サンチ榴弾砲十二門。（工兵、輜重聯隊など略）註・在満当時から歩兵団（少将を長とする指揮機関）の編制なし

第六十二師団

昭和十八年六月北支駐留の歩兵第六十三旅団、同じく六十四旅団を基幹として工兵、輜重、通信、野戦病院などを加えて編成、初代師団長は本郷義夫中将（24）、旅団は独立歩兵四コ大隊（大隊は本部、五コ歩兵中隊、歩兵砲、重機各一コ中隊、人員およそ一、四〇〇名）より成り、師団定員一一、七〇〇名。師団砲兵を欠く編制で作戦地の警備に適するような装備になっていた。

十九年三月第十二軍に属し京漢作戦（大陸打通作戦）に参加、一流師団に比して何ら遜色のない戦功を挙げ軍司令官から感状を授与された。

十九年七月太平洋戦線の戦況急変に伴ない第三十二軍の戦斗序列に編入、中支の北ウースンを出港、沖縄に転進した。転進にあたり人員、馬匹、装備、兵器を減少、人員八、三〇〇名、馬一二〇頭、自動車五十二輌に改編、各大隊は大隊長以下一、一〇〇〇名、大隊の主要兵器は聯隊砲二、大隊砲二、重機八、軽機十五、擲弾筒二〇（沖縄作戦中、人員、兵器共若干を増加）

独立歩兵第23大隊長　山本重一少佐（少11）

大阪府出身、北支駐留当時大陸打通作戦に参加、武勲に輝く、独歩第12大隊長賀谷大佐と並んで第62師団の双璧と謳われた歴戦の名指揮官、沖縄戦では前田、仲間付近の戦闘で善戦、5月14日沢岻方面で戦死。

第24師団参謀　杉森　貢少佐（49）

富山県（？）出身、20年6月下旬頃一資料によれば宇栄城洞窟司令部に於て雨宮師団長らと共に自決。

沖縄作戦では首里以北、普天間―牧港一帯に布陣（歩兵第六十四旅団は十九年十二月知念半島から牧港へ移動）米軍上陸後は周到に構築された洞窟陣地に拠って一進一退の善戦力斗月余に及び、特に東部戦線の右翼歩兵第六十三旅団の健斗は目覚しく国軍の真随を発揮した。

一方西海岸一帯の守備に任ずる左翼歩兵第六十四旅団は四月十九日米軍の奇襲攻撃を受けて伊祖城祉一帯の主陣地を失ない爾来ジリ押しに押され陸正面主要抵抗線破綻を来し首里防衛に大きな脅威を受けるに至った。このため有川旅団長は上司の不信を買い、窮地に立たされるに至ったと云う。

師団長は首里失陥後は残存兵力と共に南部島尻地区に移動、山城に司令部を設けて決死敢斗、六月二十二日摩文仁付近の洞窟で藤岡師団長、中島旅団長、上野参謀長らが自決、大隊長以下の将兵も悉く戦死して祖国に殉じた。

これより先四月二十五日牛島軍司令官は第六十二師団の首里防衛戦斗は殊勲に値するとして感状を授与している。

独立混成第四十四旅団

昭和十九年六月上旬九州で編成、主力は第一歩兵隊、第二歩兵隊、輸送船富山丸で沖縄へ輸送途中、二十九日徳之島東方海上に於て米潜水艦の雷撃を受けて沈没、第一歩兵隊長柴田常松大佐以

下主力は遭難死、僅かに第二歩兵隊長宇土武彦大佐以下五百名近くが救助されたが主要指揮官悉く戦死して戦力なく、七月から九月にかけて再編要員を本土から輸送、現地召集者を加えて次の如く再編成された。

旅団長　少将　鈴木繁二（26）
旅団司令部
高級部員　少佐　内田　博（13）
第二歩兵隊長　大佐　宇土武彦（27）
独立混成第十五聯隊長　美田千賀蔵（27）
旅団砲兵隊長　大尉　原　秀男（特）
旅団工兵隊

第二歩兵隊は本部、歩兵大隊三、歩兵砲中隊一、速射砲中隊一から成り、人員二、〇四六名、主要装備は41式山砲四、三十七ミリ速射砲四、重機関銃十八その他、第一大隊は伊江島守備、第二、三大隊は国頭地区に配備された。第一大隊は伊江島の戦斗で寡兵よく善戦健斗、戦史を飾ったが、宇土大佐を長とする国頭地区隊は積極的戦意を欠きゲリラ戦に終始、宇土大佐以下幹部が生き残り不評を買った。

これに対し鈴木旅団長の指揮する美田大佐麾下の独混第十五聯隊は天久台の争奪をめぐる米海兵隊との決戦で無類の強靭さを発揮、勇猛を詩る米海兵隊に苦杯を喫せしめ、首里戦線の崩壊阻止に貢献した。

第32軍兵器部長　桜井　貢大佐（26期）

昭和20年1月下旬赴任、同年6月下旬戦死。長野県出身。

軍司令部付将校

（昭和19年10月頃軍司令部構内に於て）註・安里の養蚕試験場。

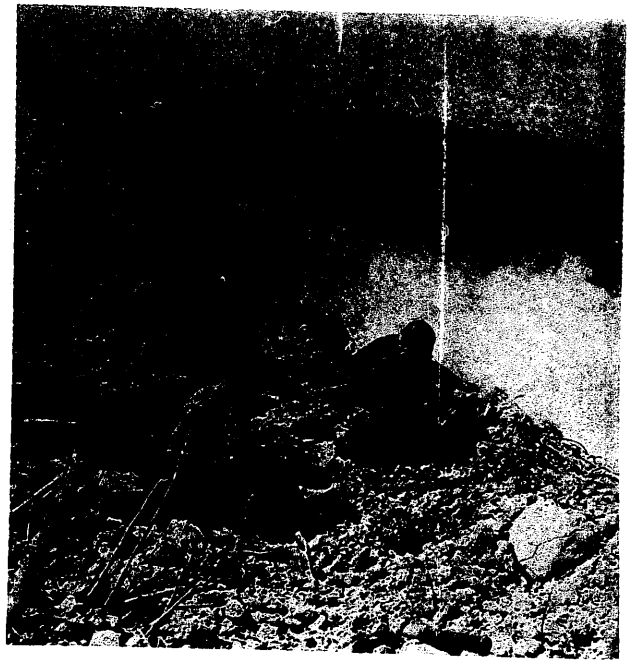
同聯隊は富山丸遭難直後急遽沖縄に空輸され、当初中頭地区に配置されたが、その後兵力の異動相次ぐに至り転々と配備先を変更すること七回に及び、陣地の構築、戦場地形の習熟等に堪え難い不利不便を来したにも拘らずその戦績は驚嘆に値するものがあり、戦史に高く評価されている。

聯隊は本部、歩兵大隊三、歩兵砲中隊、速射砲中隊、工兵中隊各一より成り、主要兵器は41式山砲四、94式三十七ミリ砲四、重機十二その他

△砲兵部隊

第五砲兵司令部

司令官　中将　和田孝助（23）



首里付近の攻防。日本軍の洞窟陣地を攻撃中の米軍（20・4・16）

高級部員　中佐　砂野芳人（35）

第五砲兵司令部は第三十二軍所属の砲兵部隊の指揮運用を統一する機関として沖縄に転用されたもので、司令官和田中将は国軍砲兵畑の逸材とされ、沖縄作戦を通じてその絶妙な指揮統率ぶりは米軍の舌を巻かせる程だったと云う。

野戦重砲兵第一聯隊

聯隊長　大佐　山根　忠（28）

十九年七月満洲神武屯より沖縄に上陸、軍命により第一大隊（高矢三郎少佐）を宮古島へ派遣、本部と第二大隊、段列（臨時編成）のみが戦闘に参加した。大隊の装備は十五サンチ榴弾砲十二門、ノモンハン事件、比島バタアン攻略に参加、歴戦の精強部隊として定評がある。

野戦重砲兵第二十三聯隊

聯隊長　大佐　神崎清治（28）

十九年十月満洲八面通より沖縄へ移動、聯隊本部、大隊二、臨時段列から成り人員およそ一、〇〇〇名、装備は96式十五サンチ榴弾砲二十四門。

独立重砲兵第百大隊

大隊長　中佐　河村秀人（39）

横須賀で仮編成、十九年七月上陸、大隊本部、中隊二、大隊段列一から成り主要装備は89式十五サンチ加農砲八門、その他小火器。

重砲兵第七聯隊

聯隊長　大佐　樋口良彦

十九年五月中城湾重砲兵聯隊を改編したもので聯隊本部、中隊三より成り、装備は加式十二サンチ速射加農砲二、38式野砲十二門。同隊は固定配備のため所在地区師団長の指揮下で戦闘を行なった。

独立臼砲第一聯隊

聯隊長　中佐　入部兼康（33）

指揮班長　少佐　久保二郎（少17）

満洲穆稜から十九年九月上陸、聯隊本部、中隊本部、中隊三、材料敵一より成り、98式臼砲二十四門、九サンチ迫撃砲二門、その他軽火器若干。98式臼砲は破壊殺傷力が大で米軍の恐怖の的となった。

独立速射砲第三大隊

大隊長　中佐　一法師鉄男（39）

満洲ハイラルから十九年七月上陸、大隊本部、中隊二、段列から成り、一式機動四十七ミリ砲十二門、その他軽火器を有し、対戦車戦闘で威力を発揮した。

独立速射砲第七大隊

大隊長　少佐　中島好生（小11）

編成装備は第三大隊と同じ。

独立速射砲第二十二大隊

大隊長　大尉　高橋　巌（54）

編成、装備は右と同じ。

迫撃第四十二大隊

大隊長　少佐　駄馬崎　豊

第9師団長　原　守中将(25)

昭和19年12月沖縄から台湾へ転進、20年3月東京へ転出。

沖縄で編成、四コ中隊で合計三式八サンチ迫撃砲四十八門を保有。

迫撃砲第四十三大隊

大隊長　松田大尉

編制、装備右とほぼ同じ。

第二十一野戦高射砲隊司令部

司令官　中佐　吉田　清（33）

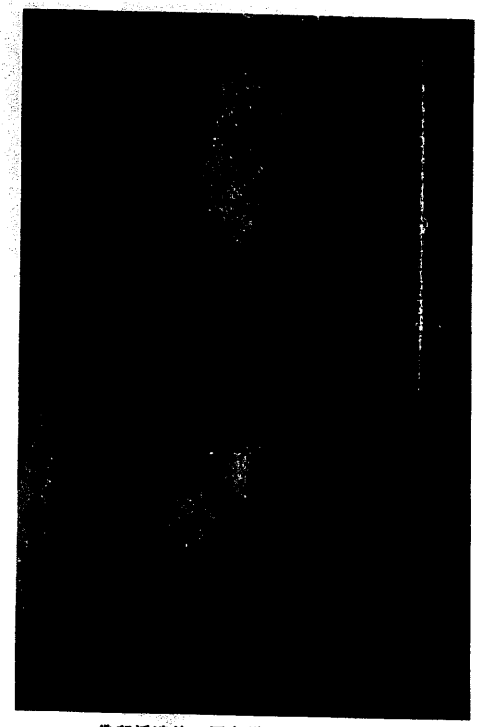
指揮下の高射部隊は野戦高射砲七十九、八十、八十一の三コ大隊。各大隊は本部、中隊三より成り、大隊合計で88式野戦高射砲十八門を装備、米軍上陸後は本来の対空戦闘の任務を解かれ、対艦艇、対戦車などの地上戦闘を実施した。

このほか独立高射砲第二十二大隊（編制、装備は前記野戦高射砲大隊とほぼ同じ）、機関砲第百三、百四、百五の三コ大隊（各大隊は98式高射機関砲十八門を装備）が吉田司令官の指揮下に戦闘に当った。

戦車第二十七聯隊

聯隊長　中佐　村上　乙（36）

在満当時関東軍秘蔵の虎の子部隊として対ソ戦に備えていたが、戦局急変に応じ沖縄投入が決まり、十九年七月満洲勃利から沖縄上陸、第三十二軍の指揮下に入った。聯隊は本部、戦車中隊四（第三中隊は宮古島派遣、第四中隊は戦車の補充なく車載機銃二十四丁を装備）、砲兵中隊一（90式野砲四、重機二）、歩兵中隊、工兵小隊、整備中隊（車載機銃六）を首里前線に配備、戦闘に参加したが沖縄戦は陣地争奪が主体になったため又地形上戦車本来の機動急襲の威力が十分発揮出来ず、首里石嶺戦線では車体を地中に埋め、砲台代りにして勇戦敢闘、五月下旬頃主力は潰滅、聯隊長以下殆どが戦死した。



佛印派遣第25軍参謀長当時の長勇中将

（昭16年夏、少将時代）

海上挺進戦隊

昭和十九年八月陸軍が戦勢挽回の新兵器として開発した特攻艇でベニヤ板製の快速ボート（自動車エンジン搭載）の艇首に爆雷を装置、艇もろとも敵船団に体当りして必沈を期すと云うものでフィリピンのリンガエン湾で初使用され、沖縄戦ではその特攻効果が大きく期待されていたと云う。終戦までに第一大隊より第三十大隊までが編成され、八コ戦隊が次の如く沖縄へ投入された。

第一戦隊　座間味島　梅沢　裕少佐（52）

第二戦隊　阿嘉島　野田義彦少佐

第三戦隊　渡嘉敷島　赤松嘉次少佐（53）

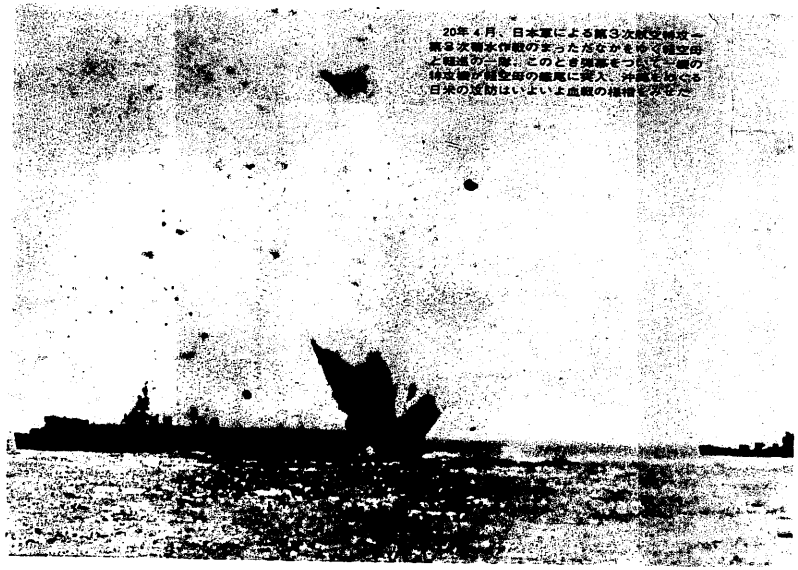
第二十六戦隊　本島　足立睦夫大尉

第二十七戦隊　本島　岡部茂己少佐

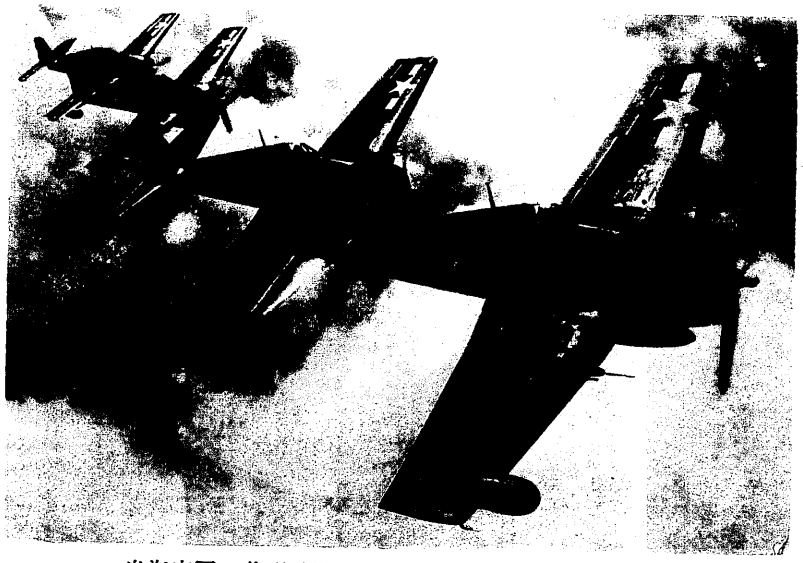
第二十八戦隊　本島　本間俊夫少佐（52）

外に第四戦隊は宮古島、第二十九戦隊は徳之島に配置された

戦隊（戦隊長は陸士51期以降の少佐または大尉）は本部、中隊三から成り、およそ百隻余の特攻艇を保有、敵船団への直接攻撃を任務とした。



20年4月、日本軍による第3次航空総攻撃—第3次菊水作戦のさ中のなかを中で爆撃機と輸送機の一隊。このとき編隊をついて一機の特攻機が爆撃母機に突入、沖縄をいろる日米の攻防はいよいよ血戦の様相を深める



米海空軍の花形戦闘機グラマン・ワイルドキャップ

隊とは別に基地の設定、舟艇の整備、泛水に当る基地大隊が各戦隊と組合わせて設けられ、地上戦闘の任務も持っていた。これらの基地大隊を統轄する指揮機関として海上挺進隊本部が設けられ、沖縄には第五本部（三池　明少佐）が十九年十月配置された。

第三十二軍では地形上（航空基地に不適）敵が慶良間列島を攻略する公算は極めて少ないと判断、本島南部に上陸を企図する敵船団を背後から奇襲するのに適す基地として慶良間列島を選び特攻戦隊の主力を配備したが、予想に反し米軍は本島上陸に先立ち三月二十六日同列島を急襲、所在部隊は地上戦闘準備の整わないうちに一方的攻撃を受けて潰乱状態に陥り又船舶部隊を統轄すべき軍船舶団長大町茂大佐（28）は渡嘉敷島から本島へ転進途中の海上で戦死、各戦隊は一部が出撃しただけで艇の大半を自沈又は破壊するの不運を余儀なくされ、切札とされた海上特攻の使命は達成されないままに終った。

海上特攻隊から不慣れな戦闘部隊に早変りした戦隊及び基地隊は山中に立てこもりゲリラ戦を展開、のち大部分の将兵が降伏、米軍に収容された。これらの島々では食糧払底、軍民相互の不信などが禍して住民の犠牲が続出、日本軍の残虐行為云々が戦後今なお尾を引いている。

第32軍高級参謀　八原博通大佐

鳥取県出身、陸士35期・駐米大使館付武官補佐官、佛印派遣軍参謀、陸大兵学教官を経て昭和19年3月第32軍参謀、沖縄作戦では戦略持久戦法で終始、長参謀長らの積極攻勢戦法を索制する立場を採った。戦後生還、鎌倉市で現存。

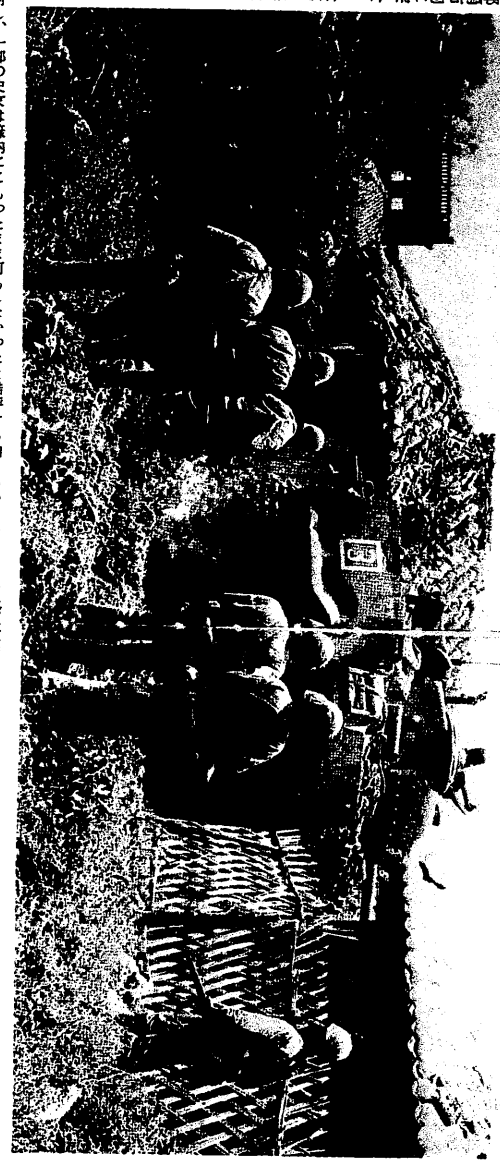
沖縄戦余談
戦後猶疑問が残る問題点

沖縄作戦については戦後いろいろな資料、伝聞、推測を基にした疑問点、問題点、真偽とりまぜた余談などが明かにされ、今日なお史家の探究に俟つ部分が少なくないが、本稿では素人の推測を加えてこれ迄余り世に知られていない点を中心に記述することにする。

一、軍司令官の更迭

第三十二軍の発足後間もなくして軍司令官の入替えが行われた。更迭の理由としては表面的には渡辺中将の健康問題が取上げられているが、一部資料によると必ずしも健康云々だけがその理由でなく、渡辺中将が能力、性格、統率力、技能などの点で沖縄のような難戦場で大軍を指揮統率する上で必ずしも適格者でないとされたからだと云う。渡辺中将は大阪府の出身で陸士二十一期、後任の牛島中将より一期後輩だが、どちらかと云えば教育畑、技術関係の勤務が長く、前職は科学技術学校長で野戦勤務はビルマ派遣第五十六師団長が主であった。従って戦斗に強い指揮官を必要とする沖縄では不適任とされたのではないかとの見方もある。それに健康上の理由が加わって更迭されたと考えるのが妥当な見方ではあるまいか。この点については最後の陸軍省人事局長額田坦中将もその遺稿で肯定的見解を残している。後任には牛島満中将（陸軍士官学校長）に白羽の矢が立ち十九年八月発令されているが、その前に坂西一良中将（二十二期）の起用が内定していた。坂西中将は当時支那戦線に在り、軍司令官の適任者とされていたが健康上（？）の理由で見合わせになったという。額田人事局長の回想によれば坂西中将は八原高級参謀と同郷の鳥取県出身、陸大兵学教官当時生徒だった長中将を指導したこともあり、さすが暴れん坊の長中将も一目置いていたと云う。坂西中将は第二十軍司令官として衡陽で終戦を迎えているが、若し坂西中将が沖縄作戦の采配を揮っていたと假定すれば沖縄戦の様相は多少変ったものになっていたのではないか。尠なくとも作戦指導についての軍事僚間の思想的対立、意見の齟齬などはある程度防げ得たのではないかとも考えられる節がある。

牛島中将については余りに有名で敢て蛇足を加える要は認めないが、作戦指導の一切を幕僚委せにして干渉するのを避けたこと



沖縄本島に上陸する米第6海兵師団の歩兵（1945年5月末）

に対し、一部の史家は壕内にこもったまま何もしなかったと酷評する向きもあるようだが、これは当らない。然し前記の頴田中将は「長参謀長と八原高級参謀との戦術思想をめぐる齟齬、不調和に対し、牛島軍司令官が何らの措置もせず黙視していたのは納得出来ない」と指摘しており、軍司令官としての姿勢に異なった評価を下す向きがあることは否定出来ない。

二、決勝兵団「第九師団」の抽出

沖縄軍の作戦準備が漸く軌道に乗り軍首脳部の自信が固まった矢先の昭和十九年十一月軍の中枢兵団とされる第九師団の比島転用が決まったことは現地軍の作戦準備の基礎を根底から覆すものとして現地軍首脳に大きな衝撃を与えた。一資料によると、牛島軍司令官の東京出発に先立って行われた陸軍省、参謀本部関係者の打合わせの席上、服部作戦課長は沖縄本島に三個師団と一混成旅団を配置すると確約したと云う。

これが事実とすると中央の現地軍に対する一種の背信行為である。もとより中央としては戦局全般の動きに応じて兵力の移動運用をするので必要とあらば既に配置済みの兵力であろうと随時自在に入れ替えすることは何ら差支えない筈だが、米軍の来攻が予想される主戦場必至の沖縄から最精鋭兵団（抽出兵団の選定は軍司令官に一任）が取上げられたことは戦局の実相に背馳した措置であり、今日なお史家の批判の対象になっているのも宜なるかなである。而ものみならずその穴埋めとして姫路の第八十四師団の追送を内示して置きながら一夜にして取消しを決めるなど中央の沖縄防衛方針が一貫性と真剣味を欠き、死守の気はくと熱意がみられないことは沖縄戦の破局を暗示したものと云えよう。

一説によると、長参謀長は以来沖縄防衛の自信と熱意を喪失、諦観的態度（表現を変えると投げ遣り）に変ったとも云う。

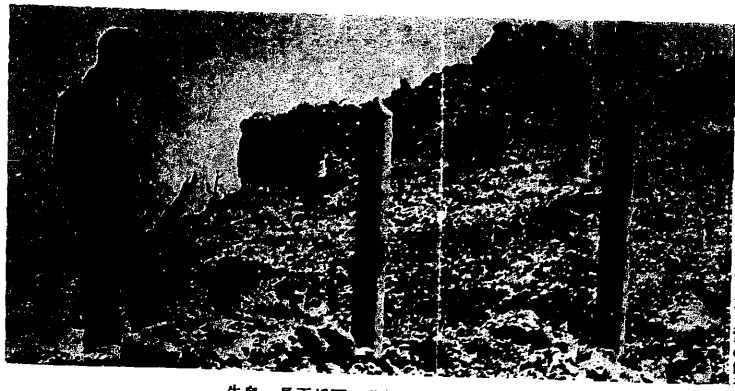
第九師団の台湾転用をめぐる一札については諸説に分かれているが、いろいろ綜合して次のことが考えられる。

一、比島決戦の掛声に伴って隷下の有力兵団を引抜かれた第十方面軍（台湾軍）が台湾防衛強化のため、兵力増強に迫られ第三十二軍の保有兵力に目を向けた。方面軍にとって都合のよいことは第三十二軍が十九年七月十五日を以てその隷下に入ったことである。換言すれば第十方面軍はこれ迄の台湾防衛の任務に南西諸島防衛についての任務も加わったことになり、従って隷下の兵団の運用についても強い発言権を持つことによって中央にその立場を主張し易い地歩に立った訳である。当時米軍の次期進攻目標について沖縄か、台湾かの二つの見方が強く、第十方面軍が離れている沖縄の防衛より足下の守りを固めるのに熱心になりがちなことは十分想像出来ることでもある。

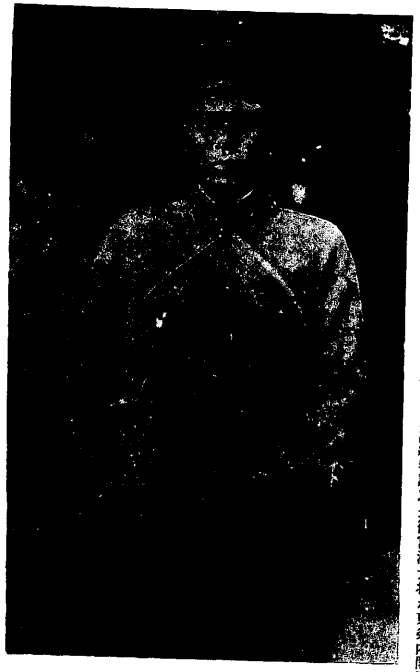
一、マリアナ失陥直後南西諸島防衛に本腰を入れ始めた中央が比島決戦の掛声に眩惑せられ、沖縄方面に対する関心と熱意が冷めてきた。特に中央の航空作戦準備第一主義の姿勢に対し現地軍は地上作戦準備に重点を置き航空基地造成に余り熱心でなかったことは現地軍に対する中央の不信を増し、両者の間に感情的に面白からぬ空気が見られるようになっていた。第三十二軍を指揮する立場にある第十方面軍としても中央との板挟みになって苦労したが、第三十二軍は隷下にありと云え海を隔てており、制空制海権が殆ど米軍の手中にある状況に於て沖縄方面で戦斗が生起しても地上兵力を派遣して直接支援することは望めず、結局航空協力程度でお茶を濁し、終局的には見殺しする外はないことを十分承知しているので中央の命令方針に従うよう強く指導督励することを遺憾したとも考えられる。

一資料（非公式）によれば、第三十二軍側は軍創立の一札なども含めて方面軍の存在を強く意識せず、対等の姿勢を装い、半ば独立軍（総軍又は方面軍に所属せず大本営直轄兵団のこと）のように振舞うこともあったようで、進んで方面軍司令官の掌握下に入ろうことを潔しとしない気風も見られたと云う。

一、沖縄防衛にもっとも熱心だった高級参謀次長後宮淳大将が東条内閣瓦解に伴う陸



牛島・長両将軍の墓標に拝礼する旧日本軍将校



第32軍副官　坂口　勝 大尉(特)

剣道五段の腕を買われて牛島、長両将軍の介錯をつとめる。生前沖縄の官民有志に知己多し。熊本県出身

1. 昭和十九年(1944年)七月十一日～同年八月上旬の沖縄本島配備要図

(9D、44MBs、15MRsが所在しているとき)

防禦の方針

軍は一部をもって伊江島及び本部半島を確保するとともに主力をもって沖縄本島南半部に陣地を占領し海空軍と協同して極力敵戦力の消耗を図り機を見て主力を機動集結して攻勢に転じ敵を沖縄本島南半部において撃滅する。

主要軍隊区分

○第三十二軍司令官（渡辺正夫中将）

○第三十二軍司令部（在那覇）

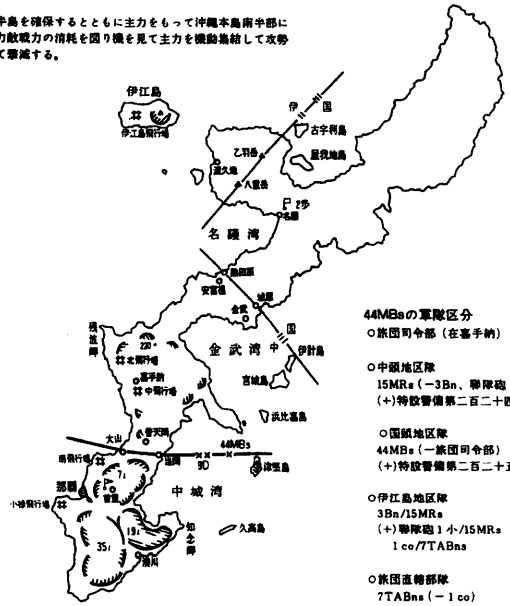
○9D（師団長　原　守中将）
(+)3TABns
1SA（−1Bn）
100SABns（−1小)(仮編成)
重砲兵第七聯隊
27AABns
特設警備第二百二十三中隊

○44MBs（旅団長　鈴木繁二少将）
（旅団は海没後で人員約300名）
(+)15MRs
7TABns
1小/100SABns（仮編成）
特設警備第二百二十四中隊
〃　第二百二十五中隊

○第十九航空地区司令部
（司令官　青柳時雄中佐）
(+)第五十飛行場大隊
第三飛行場中隊
要塞建築勤務第六中隊

○軍の直轄部隊
第三十二軍通信隊
第三十二軍兵器勤務隊
要塞建築勤務第七中隊
沖縄陸軍病院

○軍の区処部隊
第一船舶輸送司令部沖縄支部
第二十五飛行団



44MBsの軍隊区分

○旅団司令部（在喜手納）

○中頭地区隊
15MRs（−3Bn、聯隊砲1小）
(+)特設警備第二百二十四中隊

○国頭地区隊
44MBs（一旅団司令部）
(+)特設警備第二百二十五中隊

○伊江島地区隊
3Bn/15MRs
(+)聯隊砲1小/15MRs
1co/7TABns

○旅団直轄部隊
7TABns（−1co）
1小/100SABns（仮編成）

軍中央部の人事異動で満州の第三方面軍司令官に転じ、参謀次長のポストが次級次長奏彦三郎中将の専任となった。

（註）参謀本部の編制では次長は単数が常とされるが、非常の措置で東条首相兼陸相が総長を兼任する事態が生じ、十九年二月複数の次長が置かれた。

後宮大将はかって久留米師団の聯隊長時代、部下の中隊長だった長勇中将の才幹を見抜き爾来両者の間には強い信頼感が生まれ、長中将の沖縄軍参謀長起用は後宮大将の推挽が与って力あったと云う。

後宮大将は東条首相とは同期（十七期）で東条の腰巾着と酷評される程形影相添う間柄、従ってその発言権は無視出来ないものがあり、同大将が引続き中央の要職に在ったとすれば中央の沖縄防衛方針はかなり異なったものになっていたのではないか。

奏次長はモスコー大使館付武官、特務機関長、在支第三十四師団長などを歴任した対ソ戦略の権威としては知られるが、沖縄防衛についての考え方は余り明かでない。

第九師団抽出後の穴埋めのため一度内定した姫路第八十四師団の沖縄派遣中止の原動力となった三宮崎作戦（第一部）部長は十九年末支那戦線の第六方面軍参謀長から赴任したが、国軍の現状に照らし、本土で米軍を迎え撃つ以外に成算なしとして、沖縄など離島への兵力増強に消極的立場を取ってきた。本土防衛に一個師団でも無駄に出来ないのにみすみす輸送途上でやられると分かっている沖縄などに地上兵力を送ることはそれこそ無駄の繰返しではないかと云うのが、その主張のようだった。つまり沖縄は本土の一環に過ぎず、国軍の総力をあげて死守するだけの価値や戦略的意義は認められないし、又守り通す成算も立たないと云うことであった。

当時の軍中央部は相次ぐ太平洋戦線の破綻、インパール作戦の失敗、国力の凋落など不利な状況が重なり、戦局の急迫一瞬の油断を許さず、事態の収拾

と対策に追われ、統帥にも混乱の兆しが生じ、冷静な判断と対応策に欠ける嫌いがあり、沖縄防衛についての考え方が一貫性を保ち得なかったのではないかとも考えられる。

何れにしても第九師団を取上げられた沖縄軍の戦力は大まかに云って三分の一を失なった訳で、結果は沖縄作戦の経過に徴して余りにも明白である。但し第九師団の抽出がなされなかったと仮定した場合、当初米軍の上陸を水際で阻止、大打撃を与えたであろうことは想像に難くないが、結局物量には抗し得ず、かえって戦闘の長期化に伴って生ずる惨禍は測り知れないものがあったのではないか。ただ唯一の利点は現地軍として予定通り会心のいくさが出来たのではないかと云うことである。同じ敗れるにしても。

三、決戦直前の人事異動

沖縄の戦場化必至とみられるようになった昭和二十年三月の陸軍定期異動で第六十二師団長、歩兵第二十二聯隊長及び独立歩兵第十一、十四、十五大隊長などが入れ替わった。新任の第六十二師団長藤岡中将らの着任は戦闘開始二週間前でその他の第一線指揮官も部下の掌握不十分、戦場の地形不慣れのまま戦闘に突入せざるを得なかった。指揮官は部下を命令で死地に投ずるのであるから部下の能力、性格などを十分把握する要があり、又戦場の地形についても熟知を要求されるのみでなく、部下からの信頼を得ることも欠かせない条件である。従ってこのような人事は戦場の実相に背馳したものではないかとの疑問が残る。この点について沖縄作戦に関係のある某元中将（特に名を秘す。東京在）を通じて当時の陸軍省人事担当者に照会したことがあるが大要次のような見解が寄せられてきた。

「当時（二十年初頭）国軍の全戦場が決戦場であり、三月人事は国軍の人事の一環として行なわれたもので沖縄だけを例外にするわけにはいかなかった」

果してそうとすれば余りに平時的な考えであり、主戦場たらんとする沖縄を警備を主とする支那大陸、蘭印などと同一扱いするそしりを免れないのではないか。現に感情や主観を抜きにする公刊戦史でも遺憾な人事だったと指摘している。結果的にみれば本土や満洲方面へ転出した人々は生き残り、沖縄へやってきた人々は死の運命に立たされた訳である。中には沖縄勤務が発令されたが、赴任の途中戦況の急変で交通が杜絶え、赴任不能となり命拾いした組に海軍沖縄根拠地隊参謀長加藤唯男少将（のち大島方面隊司令官へ命課替え）、沖縄憲兵隊長諏訪興平中佐らがいる。

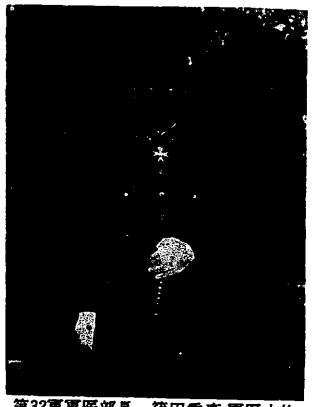
四、攻勢論と守勢論の対立

沖縄作戦の過程に於て長参謀長の積極攻勢論と高級参謀（作戦主任）八原大佐の戦略持久論が悉く対立、作戦指導に少なからず障碍をもたらしたと云う。八原大佐は陸大軍刀組の俊才、陸大兵学教官を勤め、近代戦の実相を見極め、冷静な観点から合理的に物事を処理するタイプで米国大使館付武官補佐官勤務を通じて対米事情に精通、無理は極力避けると云う式。大言壮語型の猪武者の多い少壮軍人にとってはおよそ武人らしからぬ軍人とみられたこともあったようだ。

対する長参謀長は陸軍部内切っての暴れん坊と云われ、豪放らい落、東洋豪傑型の武人として著名。満洲時代独特の対戦車戦術を編み出し、近代戦についてもかなりの経験と自信を持っていたようだが、一面粘着力に乏しいとの批判もあり、地味で忍耐の要る持久戦法は苦手。中央や

第32軍経理部長　佐藤三代治主計大佐

昭和20年6月23日未明摩文仁洞窟司令部で自決。



第32軍軍医部長　篠田重恵 軍医大佐

北満・安寧から沖縄に赴任、（19年7月）軍医少将昇進、20年7月30日富盛部落で戦死。軍医中将。

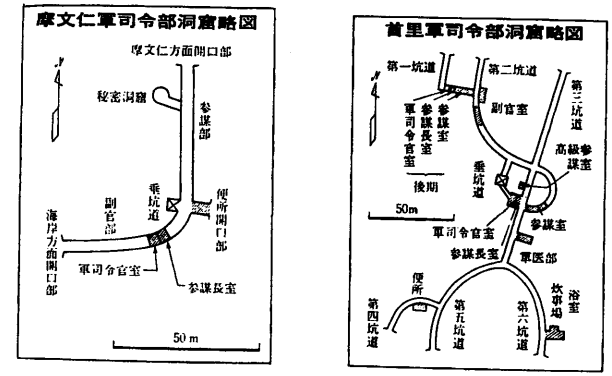
海軍から尻を叩かれるのも手伝って再三再四にわたって一か八かの積極攻勢に出るが、そのつど八原高級参謀から無謀を指摘され、五月四日の大攻勢を最後に反撃は悉く中途半端に終り、じり貧の末終局を迎えたことになるが、結果的にみて八原高級参謀の作戦指導が沖縄戦では適当ではなかったかと云うのが大方史家の意見のようである。

元来軍の高等司令部の幕僚業務は各主務者が担任業務について計画を練り起案、上司の決裁を受けて実施に移されるのが筆通で、上司といえども大筋は別として細目については余り干渉しないのが建前とされるが、人柄や性格によっては違ったものになることもあったと云う。参謀長は上司を補佐して各幕僚を指導調和させ、幕僚業務全般を統轄する仕組になっているので幕僚で意に副わない者や不適当と思われるのがおれば上司に意見を具申して取替えることも可能とされる。戦況や作戦指導についての意見、思想の不統一、齟齬は司令部の士気を沈滞させ、作戦指導を混乱させる虞れがあるに於ておやである。性格が強く果断に富む長参謀長が指導に従わない高級参謀の更迭を考えなかったのは一寸腑に落ちない。そんなことに遠慮するような長参謀長とは思えない。又牛島軍司令官が何らの措置も講ぜず、坐視していたのはおかしい。と元陸軍省人事局長額田坦中将はその著書で回想している。

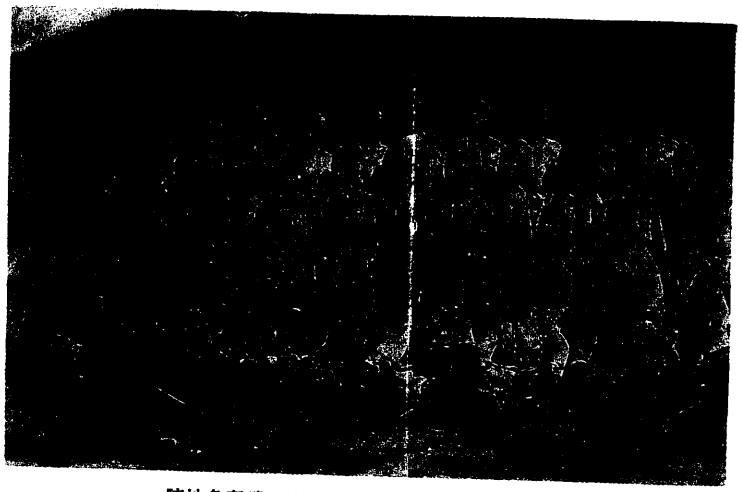
素人の憶測を許して貰うなら次のようなことも考えられないことのではない。

「八原大佐は軍創立以来の主任幕僚で作戦準備、戦法について誰よりも精通している。又その戦術眼、能力も抜群である。従ってそのポストは余人に替え難い。仮りに若干戦術思想について食違いや感情的にしっくりしない面があっても更迭などの荒療治は軍首脳の足並の乱れを敵に察知され、又友軍の士気にも響くことである。特に作戦中は尚更である。それよりも沖縄戦は所詮成算のない負いくさであり、高級参謀を更迭した位で挽回出来るものでない。結局失陥は時間の問題に過ぎないという半ば諦観的な心境が参謀長や軍司令官の胸中に去来していたのではあるまいか」

（註）インパール作戦では牟田口軍司令官の意図に副わないとして作戦開始前に軍参謀長、作戦間に三名の師団長が更迭されている。又硫黄島でも栗林兵団長の強い意見具申によって作戦開始前に参謀長、混成旅団長を始め大隊長クラスが大半入れ替えられた例がある。



那覇付近の日本軍陣地を爆雷攻撃する米兵



陣地争奪戦で威力を発揮した日本軍重機関銃
独立歩兵第13大隊（長・原宗辰大佐）機関銃中隊

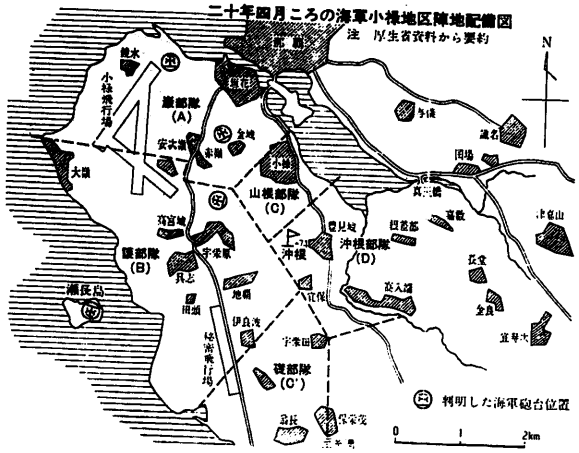
沖縄戦で善戦した独立歩兵第13大隊機関銃中隊

（2列目右より） 星野伍長、早川軍曹、畑中少尉、小川少尉、井場中隊長、関根中尉、有賀准尉（井場中隊長、畑中少尉を除き殆ど全員が沖縄で戦死）北支駐留当時の写真

戦車と火炎放射器の攻撃を受けて潰滅した日本軍陣地。手前に横たわっているのは日本兵の死体。

海軍部隊の戦斗経過

陸戦でもよく真価発揮



沖縄根拠地隊の編成

(一)中部太平洋方面の戦況急迫に伴って南西諸島方面の海軍防備の強化が焦眉の急となり、昭和十九年四月十日第四海上護衛隊と沖縄方面根拠地隊が編成され、新葉亨造少将が司令官に補せられた。

沖縄方面根拠地隊は小禄一帯の海軍地区防衛と航空協力、第四海上護衛隊は南西諸島方面海域の海上交通確保が主任務であった。

(二)沖縄方面根拠地隊は佐世保鎮守府司令長官（小松輝久中将）の隷下に属していたが、陸戦については第三十二軍司令官の指揮下に入ることになっていた。昭和二十年四月初頭ごろの根拠地隊及び指揮下部隊の編成並びに主要装備は大要次の如くであった（配備図は別表・先島地区は省略）。

沖縄方面根拠地隊　司令官　大田　実　少将
　　参謀　前川新一郎　大佐
　　〃　羽田二郎　大佐
（前南西諸島航空隊司令）参謀　棚町　整　大佐

（註）三月二十日南西諸島海軍防備隊に参謀長職が設けられることになり、加藤唯男少将が発令されたが、戦斗開始で赴任不能となり、新たに編成された大島方面陸司令官に命課替えとなった。大東島所在海軍部隊は大島方面隊司令官の指揮下に入った。外に海軍参謀として中尾八郎大佐が在職していたが、水交会の資料によると同大佐は十九年九月二十二日死亡とあり、負傷して戦後生還した中尾中佐（参謀）とは別人と推定されるが明かでない（遺族の住所不明で照会の術なし）。

根拠地兵力およそ千五百、（機銃）二十五ミリ十、十二ミリ十五、七・七ミリ二十、（砲台）二十サンチ五門、十五サンチ六門、十二サンチ五門、噴進砲五門。

南西諸島航空部隊　司令　川村　匡　中佐
兵力三千名、（機銃）二十五ミリ三十、十二ミリ二十五、七・七ミリ八十、（砲台）十五・五サンチ三門、十二サンチ六門、噴進砲六門。

第二二六設営隊　長　山根　巌　少佐
兵力三千名、（機銃）二十五ミリ三、二十ミリ二十五、七・七ミリ八、噴進砲二門。

第九五一航空隊沖縄派遣隊　長　高鷲忠雄　少佐
兵力八百、（機銃）二十五ミリ三、二十ミリ二十五、七・七ミリ八、噴進砲六。

外に各部隊合せて迫撃砲五十門。

国頭地区派遣隊
兵力六百、（機銃）二十五ミリ十八、十二ミリ十、七・七ミリ八。

陸軍派遣隊（防空隊）不明。

第二十二震洋隊（国頭郡金武）　隊長　豊広　稔　大尉

第二十七魚雷艇隊（運天港）　司令　白石信治　大尉
第二十四震洋隊（国頭郡屋嘉）
第二蛟竜隊（運天港）　隊長　鶴田　傅　大尉

（註）第二蛟竜隊とは小型潜水艦部隊で五人乗り、魚雷発射管二門を装備、敵艦船奇襲を任務とし、運天港に十一隻が配置された。第二十七魚雷艇隊（十隻）は運天港に所在、三月二十七日から二十九日にかけ伊江島周辺の敵艦船を攻撃、大きな戦果を収めたと報ぜられたが、同月末所有艇の大半を喪失して事実上戦力を喪失した。震洋隊はベニヤ板製に自動車用エンジンを搭載した体当り用特攻艇を備え、沖縄本島中、南、北部に配備されて特攻作戦を実施した。

大田司令官の着任

(三)昭和二十年三月の人事異動で新葉司令官は呉海兵団長に転補、後任には佐世保海兵団長大田実少将が着任した。大田少将は少佐当時、二・二・六事件に当り、佐藤正四郎大佐の率いる聯合陸戦隊の指揮官として帝都警備に出動、太平洋戦争では南方レンドバ島で死斗を演じ、海軍部内有数の陸戦の權威として知られ、経験も豊富なところからも決戦場沖縄に適した人事配置とされた。新葉少将については資料殆んど無く戦後遺族から寄せられた書面によると「沖縄赴任後機会ある毎に防備強化の要を上司に迫り過ぎたので敬遠されて内地へ戻されたと聞いている」とも云うが、もとより真偽は明らかでない。

沖縄決戦で戦局挽回企図

(四)海軍中央部は洋上戦斗中心の思想から本土決戦には気乗りうすで沖縄海域で総力をあげて特攻攻撃をかけ、米機動部隊を撃滅して制空制海権を奪回、機を失せず陸軍部隊による逆上陸を支援して成功の暁には戦勢挽回への糸口たらしめんことを期していた。従って沖縄の航空基地確保を強く要望、過早に敵手に帰することを警戒していたが、第三十二軍が兵力不足を口実に持久戦法に終始、積極攻勢をためらっていることに不満を抱いていた。二十年三月十五日、余り例のない根拠地隊参謀長の職制を新設、空母艦長の経験を有し、航空戦術に明るい加藤唯男少将を現地に送り込もうと試みたことも海軍の沖縄作戦に対する熱意の現われとみてよいのではないか。

精強四個大隊を第一線投入

(五)沖縄本島地区所在の海軍部隊は総兵力およそ一万名を数えたが、大半は基地航空隊、設営隊、海没艦船の乗組員、現地人隊者などの寄り合い所帯で装備、素質共良好と言えず、陸戦に適するのは三千名内外であった。五月一日戦況急迫に伴って軍司令官命により海軍部隊も陸戦に参加すべく聯合陸戦隊二千五百名を編成、四個大隊（指揮官丸山、勝田、伊

海軍沖縄根拠地隊参謀　前川新一郎大佐

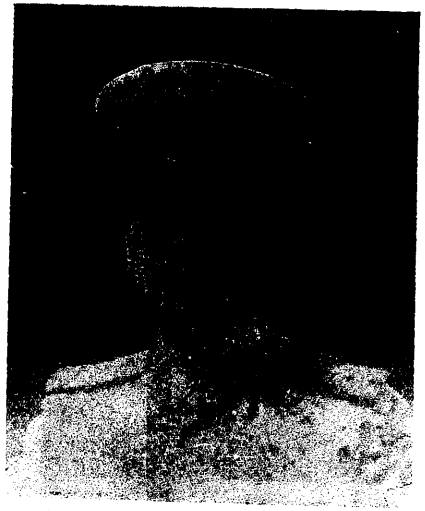
昭和20年1月赴任、6月13日豊見城司令部壕内に於て戦死

藤、田淵　の各大尉）に区分、天久、国場、識名、古波蔵に進出させ、それぞれ所在の陸軍部隊と協力、挺身斬込み、陣地戦などで敢斗、陸兵に伍して何ら遜色なき精強ぶりを発揮、更に軍主力の首里撤退に当っては掩護、軍主力の作戦に寄与した。小禄地区の海軍主力の健斗は那覇方面から島尻南部地区に進出せんとする米軍の攻撃を阻止、その重圧をはね返し、陸軍主力の南部戦線における爾後の作戦行動を容易にするなど、よく陸海協同作戦の成果を発揮、光輝ある海軍の伝統を守った。

小禄地区包囲さる

(六)六月四日米軍は小禄飛行場に上陸を開始、小禄地区の大田司令官以下の主力は腹背に敵を受け、包囲せられるに至った。牛島軍司令官は海軍部隊主力を見殺しにするに忍び得ずとして大田司令官に対し島尻南部へ撤収を命令、軍主力と運命を共にするよう勧告したが、大田司令官は四囲敵の包囲下では撤退不能なりとして小禄地区を死守する旨返電して命令に従わなかった。

（註）第三十二軍司令部は軍主力の南部後退完了後六月二日頃小禄地区の海軍部隊主力を南部地区に撤収すべく予定したが、海軍側の誤解が原因で命令下達前の五月二十六日六日司令官以下が糸満へ移動を開始、根拠地隊司令部も真栄平に移動した。



海軍沖縄根拠地隊参謀　羽田二郎大佐

海軍兵学校教官から航空戦隊勤務を経て沖縄へ。昭和20年6月13日豊見城の司令部壕内に於て戦死（新潟県出身）

その際携行困難な重火器を殆んど破壊してしまったので爾後の戦斗に少なからず支障を来した。

意外の誤算に驚いた軍司令部では二十八日軍命令で小禄地区復帰を促し、大田司令官以下主力は同夜直ちに小禄地区の旧陣地に復帰、司令部も豊見城に戻った一札があり、この一連の徒労と混乱は小禄地区の失陥を早める結果となった。

大田司令官らの自決

(七)小禄地区に対する米軍の重圧は急速に加重、十一日早朝から豊見城司令部は米軍の直接攻撃にさらされるに至った。所在の根拠地隊及び第九五一航空隊は最後の勇を揮って奮戦したが、戦況は最終段階に入り、大田司令官は有名な「沖縄県民斯く戦えり」の報告を含む訣別電を関係方面へ打電、十三日午前十時頃前川、羽田、棚町大佐などの幕僚とテい座して拳銃自決を遂げ、組織的抵抗に終止符を打った。

海軍部隊の一部は南部へ逃れ遊撃戦を展開、最後迄戦斗を継続したが大部分は戦死、白石大尉の率いる第二十七魚雷艇隊主力など主として国頭地区所在部隊が終戦後米軍に降伏、収容された。

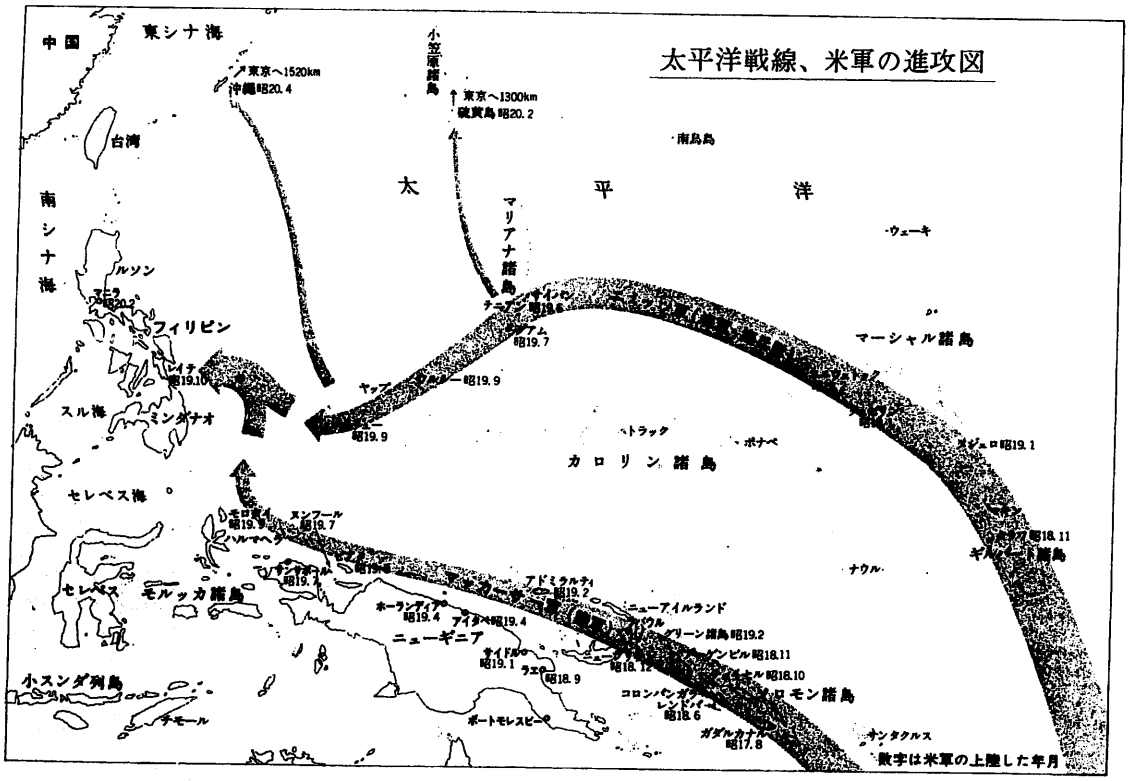
なお、海岸部隊の戦斗としては砲台、射ほう隊（海岸から魚雷を発射する）などによる敵艦船若干の撃沈なども記録されている。

海軍奄美方面隊司令官　加藤唯雄少将

海軍兵学校卒、太平洋戦争では航空母艦奄美艦長としてサンゴ海海戦に参加、20年3月沖縄根拠地隊参謀長として赴任途中、戦闘開始で不可能となり、奄美防備隊司令官に命課替えとなる。復員後51年1月鎌倉市で歿。

（写真）上は水雷艦の曲射式機銃、沖縄戦では対空用として単独又は曲射式の七・七㎜、十二・七㎜、二十㎜、二十五㎜各種が配備され、対空戦争で威力を現わしたが、敵上陸後は専ら陸戦に向けられた。

下は練習艦「八重山」＝昭和初期、沖縄に回航、艦首煙突赤十字迷彩はのちの中将＝の十二サンチ高角砲、この大砲は対空の外陸上攻撃用にも使用された。沖縄戦では対空任務終了後対艦戦、対戦車用に各種の高角砲が転用され、目覚ましい戦績を収めたと称せられた。



（写真上）大爆発を起し轟沈する大和（下）全速航行中の雄姿（昭和19年12月）

沖縄戦参加米軍兵力区分

▼一、米軍部隊および指揮官

第五艦隊　総指揮官　R・Aスプルアンス海軍大将
統合遠征部隊　R・Kターナー海軍中将
遠征軍（第十軍）　S・Bバックナー陸軍中将
第三上陸軍団（第一、第六海兵師団）　R・Sガイガー海兵少将
第二十四軍団（第七、第九六歩兵師団）　J・Rホッジ陸軍少将
第二海兵師団
第二十七、第七十七歩兵師団　（予備隊）
北部ならびに南部攻撃部隊　J・Lホール海軍少将
上陸支援部隊　W・H・Pブランディ海軍少将
砲撃および掩護部隊　M・Lディヨー海軍少将
高速空母機動部隊　M・Aミッチャー海軍中将
英国空母部隊　H・Bローリングス海軍中将
潜水艦部隊　C・Aロックウッド海軍中将
戦略爆撃部隊　W・Hヘール空軍中将
前進地区航空部隊　J・Hフーヴァー海軍中将

（備考）一、五月二十七日以後、スプルアンス大将およびミッチャー中将は、それぞれハルゼー大将（第三艦隊）、マッケーン中将と交代した。
二、英国空母部隊は米軍の指揮下に作戦した。

▼二、米軍の兵力

部隊／艦種	空母	護衛空母	戦艦	重巡	軽巡	駆逐	計
統合遠征部隊	15		8	4	11	48	86
砲撃掩護部隊		14	10	9	4	23	46
高速空母機動部隊	4	2	4	12	4	12	22
英国空母部隊	4						

遠征軍（第十軍）　四五一、八六〇名

◎沖縄戦における両軍の主要損害

▽一、艦艇の部

国別	損害	特攻機	空襲	砲台	特攻艇	機雷	同志討	作戦上	颱風	計
米国（英を含む）	沈没	26	2	1	1	4		2		36
	損傷	195	61	8	7	1	10	78	30	398
日本	沈没		10							10
	損傷		4							4

▽二、航空機の部

国別	区分	空戦	対空砲火	作戦上	地上撃破	計	備考
米国	海軍機	47	341	299		714	一、米海軍には海軍、海兵隊および英空母機を含む
	陸軍機		17	6		23	二、カッコ内の数字は特攻機を示す
日本	海軍機	3275（1050）		1850		4835	
	陸軍機	1780（850）		805	1020	3195	

▽兵員の部

戦死		戦死	
日本軍将兵	六五、九〇八	米国 陸軍	四、五八二
沖縄出身軍人軍属	二八、二二八	海兵隊	二、七九二
民間人戦闘参加者	五五、二六四	海軍	四、九〇七
一般住民	二八、七五四	計	一二、二八一
計	一八八、一三〇	ほかに戦傷、行方不明	三、一四六

（註）本表には航空関係者や奄美、先島地区及び沖縄へ輸送途中海没した兵員の損害及び民間人の項に対馬丸遭難者のような疎開途中の損害は含まれていないと解されるので、沖縄戦関係の間接的損害を加えるとこの数字を上回ると推定される。

（註）第二次大戦中における米軍の戦死者合計はおよそ三十萬名で日本側の死亡（米軍は欧洲を含む）およそ二百萬名の十分の一にあたる。

嘉手納飛行場に遺棄された特攻兵器、人間ロケット「桜花」

爆装した特攻用戦闘機よりも高速で、安価に短時間で製作できるというねらいで開発された特攻用有翼爆弾であった。一〇〇〇キロ爆弾に動力用ロケット、翼と操縦装置をつけたもので、目標ちかくの上空で中型攻撃機から発射された。命中率がひくく連合軍から〝バカ〟爆弾とよばれた。発動機：四式一型二〇固形燃料ロケット　推力九〇〇キロ　最高時速・九〇〇キロ　航続距離・八〇キロ（高度八、〇〇〇米から発射）武装・爆薬一、二〇〇キロ　全幅・五米　全長・六米。

沖縄戦は所詮勝味のない戦い

第九師の抽出は中央部の大失態

＝軍事課員南中佐の書簡から＝

沖縄作戦の成否については第九師団の抽出による現地軍の兵力不足、士気の沮喪、現地と中央との意志の疎隔、航空作戦準備の遅延などの悲観的要因から軍中央部に於ても作戦当初から勝算立たずとの空気が支配的とされていたが、軍人特有の強がり、神がかり的な必勝の信念が罷り通る当時に於ては悲観的言動は一切タブーであった。然しなかには真実を直言して憚からない硬骨漢も少しとせず、次はその一例である。

左記の一文は当時の陸軍省軍事課員南清中佐が二十年四月頃旧友の第三十八軍（サイゴン）参謀加登川幸太郎中佐（42期）にあてた書簡の一部だが、私信とは云えかなり大胆卒直に中央の失態を指摘、沖縄戦は所詮勝ち目のない戦いであることを喝破していることは注目に値する。

「沖縄戦局の推移……結局勝てません。……必勝具現の努力なきところに皇国の神機は到来しません。……第九師団を台湾に転進させ、その後埋めをやらなかったことが一大過失であり、中央部の努力不足を裏書きしています。過早に北、中両飛行場を敵に許した為に、特攻が特攻にならず、直掩（特攻機を護衛する戦闘機）は届かず特攻は喰われる率が大です。……現地軍の涙ぐましい奮闘は筆舌に尽くし得ぬものがありますが、守るに足らず、攻むるに足らずです。……本土決戦準備というかけ声につりこまれて予定通りの一個師団の追加をしなかったことが悪かったのです。……しかし現地軍はよくやっとる。長さん（軍参謀長・長中将）の電報、明朗でいつものあの姿が目に映るようだ。叙上の経緯に鑑み、内心プリプリ憤慨しながらそのカンシャク玉を敵に敵らしていることと推察する次第……」

日本軍戦車の花形　八九式中戦車（沖縄作戦には十四輌が参加した）

沖縄戦余談

元第32軍
高級参謀　八原博通

捷一号作戦発令にあたり大本営や台湾軍が大局の推移を洞察すると共に第三十二軍の台北会議に提出した意見具申書を勘案し第九師団を沖縄より抽出転用するを避け第三十二軍をして自ら計画した捷一号作戦計画をその儘に準備完成し得たとすれば嘉手納に上陸した米軍四個師団を撃滅し悼尾の赫々たる戦勝を獲得し得たるものと信ずる。即ち第二十四師団、第九師団と第六十二師団の一部並に軍直砲兵の全部を軍がかねてより計画する一屯爆弾と十六吋艦砲弾を嘲笑するに足る堅固な築城地帯に機動集結し嘉手納に上陸する米軍をその混乱に乗じ我が空軍の協同攻撃と相俟って撃滅し得たるものと確信する。

その理由次の如し

一、敵主力の上陸方面はその決行数日前に察知し得たり故に軍は主力の機動集中は迷うことなく余裕を以て実行し得たる筈なり。

二、四月19日敵は野砲大隊27個大隊、戦艦六、駆逐艦六を以てする艦砲射撃並に七百機を以てする航空機の攻撃を以てする史上稀に見る大攻撃準備砲爆撃を以てしても日本軍の防禦陣地を破壊すること不可能にして爾後三個師団を以てする地上攻撃も約六日間を要して漸く我陣地の一角を占領したに過ぎない。

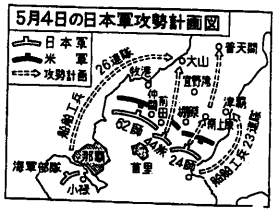
三、不動一貫した昭和十九年秋から二十年四月にわたる捷一号作戦計画の方針に基く軍の作戦準備に依り、軍の築城並に各部隊の機動訓練はいよ〳〵精強となる。前述第一、第二項の有利なる條件により、その攻撃は愈々有望となる。

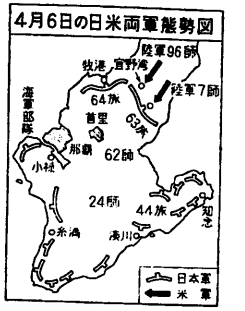
四、軍の希望を容れ大本営が特別に増強した軍砲兵（野重二個聯隊、独立重砲一大隊、臼砲一聯隊、軽迫撃八個中隊、中迫撃二個大隊）等を有利に機動活用し敵上陸軍を潰滅する。

以上諸條件を考慮すれば敵嘉手納正面上陸を撃破することは可能である。この際第九師団を沖縄より抽出他に転用することは日本軍の作戦上の重大なるミスとなる。逃げた魚は大きいと云う諺があるが実際の沖縄戦で苦戦苦闘した我が友軍十万将兵の怨は尽きない。

（註）沖縄軍の本格的攻勢計画

第三十二軍は中央及び第十方面軍よりの度重なる督促と長参謀長の強い指導も伴なって五月四日これ迄の戦略持久戦法を一擲して首里北方東西の戦線に於て全力を挙げて攻勢に転じ、局地的には成功する面もあったが、隔絶した米軍の火力に妨げられる損害続出、初期の目的を達成するに至らず、翌五日夕攻撃を中止、持久態勢に復し二度と攻勢をとることがなかった。





沖縄ホテル玄関と女子従業員）右端は宮古島から出張してきた第28師団軍医部次級部員山田量軍医少佐（昭和19年秋）
沖縄ホテルは那覇市波の上に建てられた県内唯一の洋式高級ホテルで東条首相を初め皇族など顕官が宿泊した。

（写真・右上）沖縄陸軍病院長広池文吉軍医中佐

＝三重県四日市出身＝（左上）第九師団参謀部勤務の兵隊さん達＝昭和19年夏首里市内で＝（左下）軍事教練に励む鉄血勤皇隊員＝県立八重山農林校生徒）

第十方面軍（台湾）の沖縄作戦協力について

台湾軍と沖縄軍（第三十二軍）は昭和十九年七月十五日大本営陸軍部命令によって第三十二軍が西部軍（九州）の隷下を離れ、台湾軍の隷下に編入されたことにより第三十二軍は爾今台湾軍司令官の指揮下に置かれるようになった。台湾軍はこれを契機に方面軍（二個以上の軍を集めて編成されたもの）に格上げされたが、両者の位置は遠く海を隔て交通連絡が至難を極めたことや第九師団が台湾に転用されるまでは兵力的には第三十二軍の方が優位に立つ関係などもあって上下の関係は必ずしもしっくりしなかったようである。特に方面軍が中央の意図を体して航空作戦重点主義で第三十二軍を指導しようとしたのに対し、第三十二軍首脳は地上作戦優先を主張してしばしば対立、容易に譲らなかったため、方面軍は中央との板挟みになって立場に困る場合も尠くなかったと言う。

又、第九師団の台湾転用の結果、第三十二軍の兵力不足が問題となり、方面軍では二十年三月航空基地確保の配慮上、独立混成第三十二聯隊を沖縄へ急派することを決めるなど沖縄軍の兵力増強に熱意を示したが、時既に遅く戦闘開始となって実行に至らず、更に五月四日の沖縄軍最後の総攻撃にあたっては在宮古島部隊から歩兵数個大隊を抽出し、増援することを企図したが、状況これを許さず計画倒れに終っている。

このように第十方面軍の沖縄に対する地上兵力の増援は悉く失敗に終ったが、安藤軍司令官は水際撃滅戦法を持論としている建前上、沖縄軍の戦略持久一点張りの戦法にあきたらず、又中央からの督励もあって黙視し得ずとして再三再四攻勢転移を要求、双方の間に感情的な応酬が交されたことも再三に止まらなかったと言う。結局方面軍の沖縄作戦協力は事実上、第八飛行師団による航空特攻作戦に限定され、しかも六月上旬に至り先島群島方面への敵来攻の公算大を理由に航空主攻作戦が打ち切られた結果、中途半端の感みを残した。

第十方面軍は隷下に第三十二軍の外に台湾南部の防衛にあたる第四十軍を新設、沖縄から転用した第九師団を加え、二十年一月五個師団と六個独立混成旅団を整えたが、混成旅団の大半は台湾人徴兵が兵員の四〇％近くを占め、訓練もいき届かず、初期の戦力は期待されなかったという。

二十年五月末先島集団（先島群島所在部隊）は第三十二軍の戦闘序列から除かれ、第十方面軍の直轄下に入ったが、終戦後台湾地区は国民政府の管理下に移り、所在の陸海軍部隊は蔣介石軍に降伏、一部を除き全員復員した。

終戦時における第十方面軍司令部及び第八飛行師団司令部の主要陣容は次の通りである。

(一) 第十方面軍（司令部台北）

軍司令官	大将	安藤利吉（16期）
参謀長	中将	諫山春樹（27期）
参謀副長	少将	宇垣松四郎（31期）
高級参謀	大佐	村沢一雄（34期）
参謀兼総督秘書官	大佐	木佐木久（33期）
参謀（作戦）	少佐	井田正孝（45期）
〃（情報、防空）	少佐	大沼清（37期）
〃（情報）	少佐	杉浦成孝（44期）
〃（通信）	少佐	中村一馬（44期）
〃（後方）	少佐	安藤正（47期）
〃（航空情報）	少佐	三浦辰夫（50期）
〃（航空作戦）	中佐	羽牟慶太郎（36期）
〃（動員）	少佐	杉江通（47期）
〃（船舶、鉄道作戦主任）	中佐	西浦節三（42期）
高級副官	大佐	三好善平
〃	大佐	宮田次男（28期）
兵務部長	少将	国方慶三（22期）
兵器部長	少将	佐々木博（24期）
経理部長	主少将	国本正義
軍医部長	医少将	西山啓吉

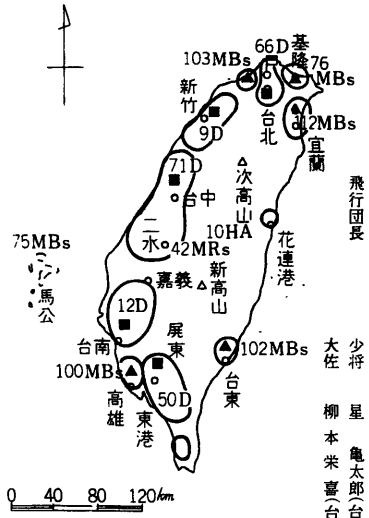
獣医部長　獣大佐　鈴木　清
報道部長　大佐　大久保　弘一（27期）
憲兵隊司令官　少将　上砂　彌七

（二）第八飛行師団（司令部台北）

師団長　中将　山本　健児（28期）
参謀長　大佐　岸本　重一（34期）
参謀（作戦主任）　中佐　石川　寛一（41期）
〃（作戦補佐）　少佐　三浦　正治（48期）
〃（情報主任）　少佐　三浦　辰夫（50期）
〃（教育主任）　少佐　西　篤（46期）
〃（部隊指導）　大佐　福沢　丈夫（34期）
〃（後方編成主任）　少佐　川野　剛一（47期）
〃（通信主任）　少佐　梶山　健（38期）
高級副官　中佐　岩間　新三（49期）
兵器部長　大佐　佐永石　正久（36期）
軍医部長　医中佐　佐々木　義孝

※　※　※　※

飛行団長　少将　星　亀太郎（台湾南部）
大佐　柳本　栄喜（台湾北部）



地上兵力配備要図

米・台湾攻略中止を決定

小笠原、沖縄を経て本土進攻へ

一九四四年（昭和十九年）太平洋戦域での総反攻を開始した米軍は四十五年（昭和二十年）春を期して台湾攻撃作戦に踏み切ることを決め、八月には主要作戦参加部隊、指揮官等を内定して着々準備を進めていた。中部太平洋から日本々土に迫る米太平洋艦隊司令長官チエスター・W・ニミッツ提督は台湾を経て中国沿岸を段階的に攻撃、日本々土進攻の足掛りにすることをも考えていたようである。

然し四四年秋以降日本軍の海空戦力が急速に低下するに伴ない米軍の進攻作戦のテンポは一段と飛躍、比島制圧後台湾を飛び越して一気に琉球諸島に迫るのが得策だとする意見が部内に高まり、台湾進攻作戦は再検討を要する状勢となった。ニミッツ提督は作戦変更について太平洋方面陸軍司令官ロバートソン同じく陸軍航空司令官ハーモンド、台湾進攻上陸軍の指揮を執る第十軍司令官（内定）サイモン・バックナー各将軍の意見を徴した結果、次のような結論に達した。

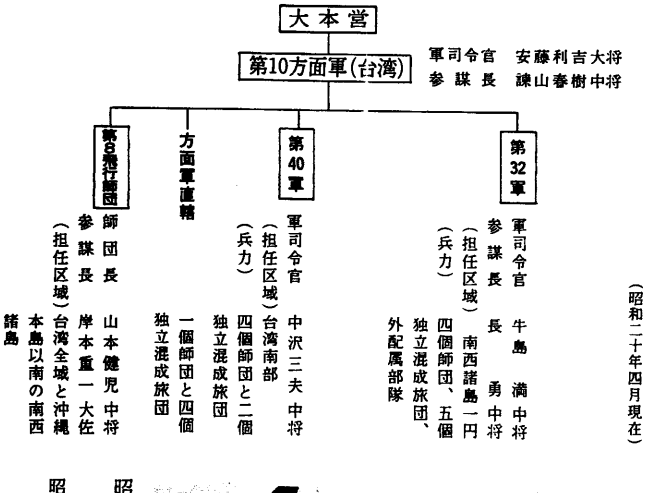
台湾攻撃の戦略的意義は比島の制圧によって失なわれる。日本々土進攻の基地としては琉球の方が台湾より価値が大きく、且つ琉球の攻撃は台湾より比較的少ない兵力と日時で済む。従って徒らに犠牲の掛る台湾進攻作戦は戦略的にも無意味である。

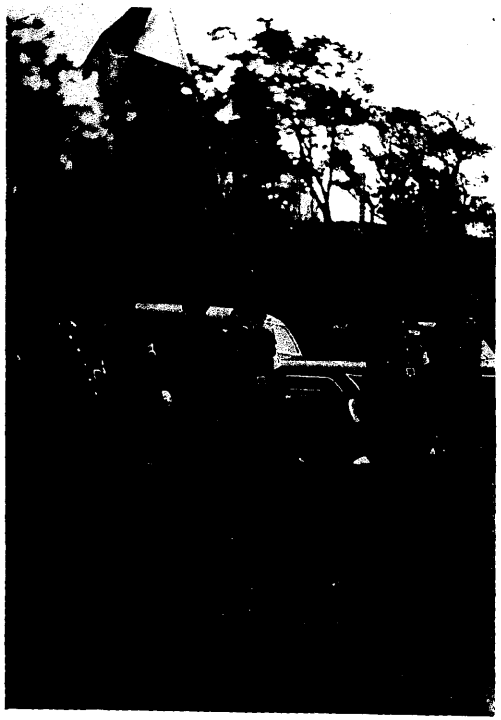
米海軍の総帥アーネスト・キング元帥も台湾攻撃にはかねてから疑問を抱き小笠原、琉球を経て本土へ進む方途を考えていたのでニミッツ提督らの見解一致を機会に四十四年十月台湾攻略作戦の保留を決定、マッカーサー軍の比島進攻と併行して小笠原諸島、次いで琉球攻略作戦の準備に着手するようニミッツ提督に命令、台湾素通りがきまった。

一方、日本軍中央部では米軍の進攻路について比島―台湾若くは小笠原、琉球の線を予想していたが、四五年初頭（二十年）迄は米軍が台湾に取りつく可能性も無視出来ないとの考えも有力で後日沖縄防衛に大きな累を遺した第九師団の台湾転用はこのような軍中央部の判断がその一因となったとされている。ともあれ、琉球の運命は四十四年十月の台湾進攻作戦中止と同時にきまったのである。

第十方面軍（昭和十九年八月台湾軍を改称）隷下、指揮下の主要兵団

（昭和二十年四月現在）





昭和19年初頭台北市明治橋公園における方面軍首脳。

右から安藤軍司令官、その左兵務部長藤岡武雄少将（のち北支の独立混成旅団長に転出、昭和20年3月第62師団長として沖縄に赴任、6月戦死した）

昭和19年1月台北で行われた学生班合演習を閲兵する第10方面軍司令官 安藤利吉大将,

宮城県出身、陸士16期、教育総監部本部長、南支派遣軍司令官を歴補、昭和16年仏印進駐事件の責めを問われて予備役編入、17年4月本間雅晴中将の比島第14軍司令官として出征したあとを亨けて台湾軍司令官親補(召集で現役に復す)、大将進級、19年末台湾総督を兼任、戦後戦犯容疑で中国側に捕えられ上海で服毒自決。

第8飛行師団長 山本健児中将

高知県出身、陸士28期、操縦士出身の将軍、太平洋戦争では第7飛行団を率いて南方各地を転戦、昭和19年7月第8飛行師団長(台湾)、沖縄戦では麾下の第9飛行団を石垣島に進出させて沖縄特攻作戦を指揮した。

昭和50年9月15日歿、79才。

方面軍参謀長 諫山春樹中将

陸士27期、参謀本部課長、ビルマ派遣軍参謀長、比島第14軍参謀長などを歴補、東京で現存。

降伏調印式 (1945年9月7日・米第10軍司令部前広場)

南西諸島所在の残存日本軍を代表して先島集団長(佐宮古島・第28師団長)納見敏郎中将が降伏文書に署名した(写真)左から前列・奄美地区守備隊司令官(独混第64旅団長)高田利貞少将・海軍奄美方面隊司令官加藤唯男少将・後列左から独混第64旅団司令部高級部員中溝猛中佐・第28師団参謀長一瀬持大佐・海軍参謀・向かって右端は米第10軍司令官スチルウエル大将。

壮烈・島田知事らの殉職

余りに大きかった非戦斗員の犠牲

太平洋戦争を通じ最後の陸上戦斗の中心となった沖縄戦の特色は多くの非戦斗員が戦火に巻込まれ、夥しい犠牲を生じたことであった。

住民が戦火に曝された例はマリアナ群島でもみられたが、日本固有の版図である沖縄県が外敵の侵寇を受け、戦場に供されたことは歴史始まって以来、まさに驚天動地と云うべきことだった。

およそ三カ月間に亙る戦斗で生じた彼我の人的損耗については未だ正確な資料は得られないが、死亡者の内訳は大体次の如くとされている。

(1) 日本側

本土出身将兵	六五、九〇八人
県出身軍人軍属	二八、二二八人
民間人戦斗参加者	五五、二四六人
一般住民	三八、七四五人
外に日本軍将兵の捕虜	七、八四一人

(2) 米軍　側

陸軍	四、五八二人
海兵隊	二、七九二人
海軍	四、九〇七人
計	一二、二八一人

以上の如く彼我合せて二十萬六百五十六名が戦死していることになるが、この中には二、五七一機に上る陸海軍特攻機及び直掩機などの搭乗員、戦艦大和を基幹とする水上特攻戦艦の戦歿者三、八九七名、更に沖縄戦生起前における海上輸送中の遭難将兵及び民間人などを加えると沖縄戦を通じての日本側の人的損害は二十萬名（奄美大島群島、先島群島関係を除く）を上回るものと推定され、特に戦斗の焦点となった沖縄本島の場合、開戦前の所在人口四十数萬名の四分の一以上が戦火の犠牲となっていることは永遠に忘れ去ることの出来ない痛恨事として銘記さるべきであろう。而もこれらの非戦斗員の犠牲の殆どが日本軍主力の首里撤退に伴う南部一帯の戦場化によって生じたことに着眼すれば、南部に於ける日本軍の抗戦は勝算なき最後の足掻きに過ぎず、米軍にとっては殲滅掃蕩の域に止まり、この結果夥しい無辜の一般非戦斗員が犠牲に供せられたことは余りに大き過ぎた代償と云わねばならない。

本稿では非戦斗員の戦禍については詳述を避け、主として島田知事を頂点とする官公吏、報道関係者、学徒隊などの殉職についてその大要を記述するに止める。

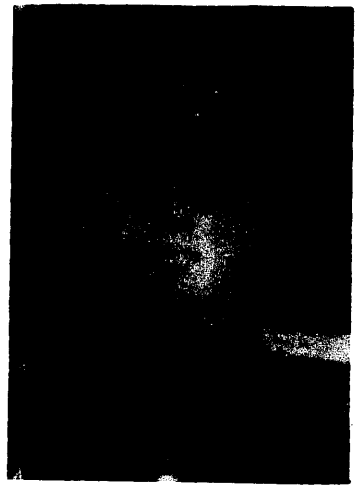
(1) 奏任官及び同待遇官以上の主なる殉職者

戦時行政官の亀鑑　島田知事

敗色濃ゆき二十年一月末、泉守紀氏（十八年七月北海道内政部長より沖縄県知事）の後任として戦場化必至の沖縄県に着任、戦場行政の最高責任者として挺身陣頭指揮を執り、軍民の信頼極めて厚かった。

戦況不利に伴い二十年五月末南部に後退、六月二十二日頃壕内で自決、四十二才の生涯を閉じた。安部内務大臣は戦時下行政官の亀鑑なりとして七月九日賞詞（軍人の感状に相当）を贈り、その功を讃え、今猶その人徳は内外から敬慕の的となっている。

同知事は神戸市の出身、沖縄県知事発令前は大阪府内政部長（勅任）のポストに在り、将来を約束された有為の行政官で沖縄県配転は格下げとされ而も戦場化必至地への赴任は二の足を踏むのが常識化していた。現に内政部長（官房長兼任）伊場信一、経済部長牧福松氏らの高級官吏を始め課長クラスの幹部職員のうちには出張連絡の名目にかくれて本土へ渡り、帰任を肯ぜざる者跡を絶たず、このような状況下の沖縄赴任は死へ飛び込むようなものであったが島田知事は率先この難役を快諾、遺憾なく大役を果たし沖縄の一角に骨を埋めた。



沖縄県知事島田叡(あきら)氏

（写真は愛知県警察部長当時）島田氏は前任の泉守紀氏の転出のあとを亭けて昭和20年1月末着任戦場行政の最高責任者として率先陣頭に立ち軍官民一致の決戦体制の確立、住民の保護指導に心血を注ぎ後世に遺る業績をあげたが20年6月末荒井警察部長、佐藤特高課長らと共に南部で殉職、沖縄で骨を埋めたのち内務大臣より行政官の亀鑑として表彰を受け今日なお徳を慕われている。明治34年兵庫県生れ。前任は大阪府内政部長（勅任）

沖縄県特高課長　佐藤喜一氏（真中　国民服の人）

昭和16年11月赴任（前任は内務省属）沖縄戦中島田知事と行動を共にし20年6月20日頃島尻郡南部の壕内で自決(?)一隣は友人と家族、沖縄赴任を前にしての記念写真と推定」

これに反し任地を乗て香川県知事のポストに納まった泉守紀氏は日ならずして「戦時下地方行政官の本分に悖るもの」として文官分限令により罷免せられたと云う。

—県警察部長　荒井退造

栃木県出身、明治大学法学部卒、昭和十八年初め福井県官房長より赴任（前任者は水川依夫氏）、最後の警察部長となった。当時の県行政機構は知事官房、内政部（総務部を改称）、経済部、警察部を四つの柱として構成され、学務部は内政部に統合、教学課に縮少されていた。県の主要陣容は知事の下に内政部長伊場信一、官房長牧福松、警察部長荒井退造の諸氏。十八年一月経済部新設に伴い牧官房長が経済部長に転じ後任官房長は補充せず伊場内政部長兼任となったため、三部長が県行政運営のかなめ的役割を果たしてきた。ところが戦況悪化に伴い、十九年末から二十年初頭にかけ伊場、牧両部長は出張の名目で上京、健康上の理由で帰任せず、部長クラスでは荒井氏一人が孤塁を守るのみ。島田知事は着任後各部の筆頭課長を以て部長代理を命じ、戦場行政上萬全を期したが、部長、課長ら幹部職員の相次ぐ脱出は官民の士気を沮喪させ、実務の面で少なからぬ支障を来したことは否定出来ない。

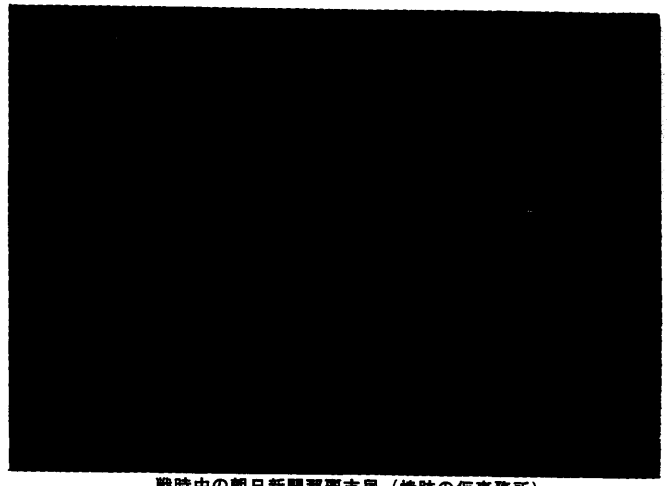
荒井氏は着任早々から県民と運命を共にする腹を決めていたようで旺盛なる責任感と持ち前の積極性を発揮、現地軍の信頼も厚かった。米軍上陸後も困難な戦況に屈せず、必勝の信念と不退転の決意を失わなかったが、たまたま悪性のアミーバ赤痢に罹り衰弱著しく、六月九日警察予備隊に解散を命じたあと二十二日頃島尻郡伊敷付近の壕内で島田知事と運命を共にしたと云う。享年四十三才。

—県特高課長　佐藤喜一

宮城県出身、昭和十六年十一月内務省より赴任（前任者は地方警視佐々木磯郎氏）二十年六月二十日殉職する迄三ヵ年半の在勤、特高課長としては異例の長期勤務であった。元来特高課長は高等文官試験をパスしたエリートの占めるポストで、一府県に於ける勤務年限は一年ないし二年を出なかった。佐藤氏は巡査から叩き上げた特進組の一人で高文の資格は有していなかったが剣道の高段者で辣腕家の評もあり、戦局緊迫化にあっても泰然自若の構えを崩さなかったと云う。殉職時の年令四十四才。

土木課長	久保田秀雄
農務課長	古郷　仁作
耕地課長	佐藤　了蔵
動員課長	小松　好郎
官房主事	仲宗根玄広
地方事務官	岩井茂則
地方事務官	橋口　渡

六月二十日頃伊敷で殉職
六月二十日頃殉職
摩文仁で殉職
六月十九日摩文仁で殉職



戦時中の朝日新聞那覇支局（焼跡の仮事務所）

（後列左から）牧港篤三氏「現沖縄タイムス専務」那覇支局長宗貞利登氏「殉職」日高藤吾氏「朝日新聞特派員」、右の女性岸本さん、（前列2人目）屋嘉比さん「朝日支局員」昭和20年2月中旬頃と推定。朝日新聞支局は10・10空襲後那覇市内松尾の新県道筋にあたる上地一史氏「沖縄新報記者、のちの沖縄タイムス社長」宅に移転した。

会計課長　真栄田　実
地方事務官　比嘉良啓　六月十五日殉職
島尻地方事務所長　山城久正
中頭地方事務所長　勝連盛良
地方技師　南郷不二夫　六月二十日喜屋武で殉職
地方技師　小野田孝吉　六月二十日喜屋武で殉職
地方技師　成合　義賢　五月二十八日具志川村役所付近で殉職
地方技師　島添　楽次
地方技師　横合　正信
地方警視　内間　棋明
地方警視　大宜味朝昌
官職名不明　渡久地政達
〃　〃　湧川　亀助
〃　〃　宮平　盛昌
〃　〃　新里　清昌
〃　〃　木村　重郎
〃　〃　北村　秀一
〃　〃　佐光喜一郎

以上の外県庁職員並びに各省出先機関々係官公吏の犠牲者は数百名を数えた。県庁職員及び警察職員は島田知事及び荒井警察部長指導の下に後方指導挺身隊、警察警備隊を編成、住民の士気高揚、保護、食糧増産、情報伝達など弾雨下を冒して決死の活動を行ない、軍の作戦に協力した。

鈴木部長判事以下裁判所関係職員三十二名が殉職

那覇地方裁判所長並びに検事正は共に勅任官（二等）で県知事と並んで三閣下と云われ、軍関係を除くと一般官公吏のトップに位置、権威があった。一資料によると昭和十九年末現在の沖縄県関係裁判所、検事局、登記所関係職員の定数はおよそ九十余名で、うち十数名が応召欠員となっていた。

業務は戦闘開始前迄続けられ、その後は壕から壕への避難行に終始した。松山町の裁判所及び検事局などの庁舎は十・十空襲で損壊、一時首里の安国寺に設けられた仮庁舎に移転したが数日後本庁舎へ復帰、損壊部分を仮修理して使用した。二十年二月空襲が本格化し、那覇地区が危険となったので安国寺に再移転、米軍上陸後は付近の

壕内に移った。五月下旬二班に分かれて南部へ撤退、六月五日水谷所長以下伊敷の壕に入ったが団体行動は不利として十日解散、各自安全地を求めて自由行動を取った。水谷所長、池田検事正らはその後米軍に収容され、南部で抑留、のち北部で収容生活を送り二十一年本土へ帰還した。然し地裁部長（民刑兼任）判事鈴木泰氏（静岡県）は六月八日糸満町伊敷で殉職、この外裁判所（司法省）関係職員三十二名が犠牲となった。参考迄に昭和二十年初頭に於ける司法省関係機構及び人事の概要を左記する。

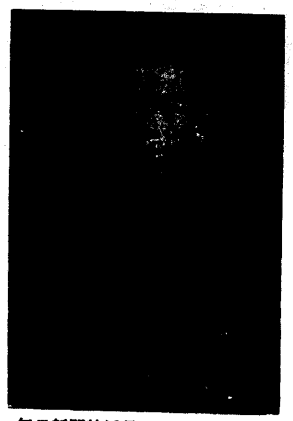
(1) 那覇地方裁判所
所長　水谷秀一（新潟県出身）
部長判事　鈴木　泰（静岡県出身）
判事　富川盛介（石垣町出身）
（地裁判事一名、予審判事一名欠員）

(2) 那覇区裁判所
監督判事（地裁判事兼任）
江口種夫（佐賀県出身）

(3) 平良区裁判所　十九年十一月裁判事務停止

(4) 那覇地方裁判所検事局
検事正　池田九郎（広島県出身）
次席検事　岡田藤太（熊本県出身）
検事　五十嵐力
（十九年末中島友司検事の転勤に伴う後任補充なしで検事一名欠員）

猶一説によると裁判所の法廷が陸軍軍法会議に使用されたと云うが、明確ではない。



毎日新聞特派員　下瀬　豊氏

昭和20年2月9日着任　現地軍報道班員として決死前線報道に挺身
26年6月18日頃殉職　長崎県出身

弾雨下の決死報道
地元「沖縄新報」の活動と宗貞下瀬両特派員の殉職

沖縄戦に於て特筆すべきものに民間報道関係者の活動があり、壕内に印刷設備を持ち込み敵前に於て取材印刷発行、軍官民の士気高揚、戦況の伝達に決死敢斗した地元新聞「沖縄新報」＝昭和十五年十二月一県一紙として発足＝社員の活動は新聞史に不滅の業績を遺すもので、その責任感と信念は今日でも称揚に値いする。

地元報道関係の殉職者は十二名、この外朝日、毎日の特派員二名が軍と運命を共にしている。即ち朝日新聞那覇支局長宗貞利登、毎日新聞特派員下瀬豊の両氏で、前者は二十年二月二十四日台北から、後者は二月九日福岡の雁の巣飛行場からそれぞれ空路赴任している。二十年二月と云えば米軍の沖縄来攻は必至で、戦場化は不可避とみられていただけに命令で動く軍人は別として非戦斗員の場合、まさに決死の覚悟が前提となる訳で如何に戦時下とは云え余程の使命感と勇気の持主でなければ出来ない芸当である。

宗貞、下瀬両特派員はそれぞれ着任後毎日新聞那覇支局長野村勇三氏（現存）と共に軍参謀長命で陸軍報道班員に依嘱、那覇無電局を通じて戦況ニュースを本社へ送稿していたが、連絡が不十分のせいか行き届かず、朝日新聞の場合、宗貞特派員の従軍第一報が五月十三日付一面トップに「沖縄本島最前線にて宗貞特派員十一日発」との戦況ニュースが報ぜられたくらいに止まっている。恐らく那覇無電局は軍の通信で忙殺され、戦況ニュースの受付などに余り構っておれなかったのではないか。宗貞支局長は責任感の強い生真面目な性格で、折角決死の取材を冒して書上げた原稿が本社に届くかどうかを常に気にしていたと云うが、結果から見ると軍側の好意的協力が得られたかどうか疑問である。加えて軍主力の首里撤退に伴い五月二十五日那覇無電局は爆破、爾来通信は軍の通信系統に依存するの外なかったと解されるが、五月下旬以降は文字通り敗残の逃避行で報道班員としての業務は果たせたか、どうかは疑問である。

これは余談だが、戦闘が始まる三月下旬頃迄（恐らく二十日頃迄）未だ沖縄と本土との航空連絡が細々と続いていた当時島田知事や各官公署（各省の出先機関）の責任者と東京との間には色々の機密文書及び電報の往復がなされていたと推定されるが、

殆ど公表されていない。内務省や司法省などには島田知事や裁判所長からの報告、各種伺いなどが届いていた筈だし、又これに対し本省から出された訓令などの記録や写しが保管されている筈である。律義な島田知事が戦斗開始後も含めて住民の状況などについて一片の報告連絡もしなかったとは考えられない。軍側が発受信を押えたと云うのなら別だが――。この間の事情が明らかになると中央部が非戦斗員の処置などについてどのような考えと方針を以て臨んでいたか、などの事情を知る有力な資料となるものと考えられる。

毎日新聞支局の場合は始め県特高課長官舎――県庁裏の民家――、繁多川、識名の県庁地下壕と転々し前線支局を設けて活動、五月下旬軍報道部と合流、二十六日南部へ脱出、翌日摩文仁に集結したが、その頃は百十八名の報道部員が二十二名を余すのみとなっていた。暫く壕内生活を送るうち六月十五日内地へ脱出して全国民へ沖縄戦の実相を伝えよと、軍参謀長の命を受け同夜海上脱出、A班野村支局長、B班下瀬特派員、陸上班朝日新聞宗貞支局長の順で海岸へ出て北部を目指し脱出の途についた。これに先立ち脱出後の落合う場所を知念岬突端の松林と決め、一週間待つと手順を設定、当夜は島田知事も見送り、夫人心尽しの羽二重を贈って壮途を激励したと云う。

三氏には先導役として地理に詳しい兵二名ずつが付けられたが、十九日野村氏が海岸のリーフで負傷、米軍に捕えられたのみで宗貞、下瀬両氏は消息を絶ち、その後の調査で下瀬氏は十八日、宗貞氏は二十三日それぞれ殉職したものと推定された。一方米軍に捕えられた野村氏は玉城村の収容所を脱走、ひそかに知念岬に潜入して宗貞、下瀬両氏を待ったが、約束の日限が来ても両氏が現われなかったため再会を諦め、百名の収容所から屋嘉――嘉限を転々し、戦後宮古島を経由、本土へ引揚げた。これより先、毎日新聞社では下瀬記者に対し次の賞を贈り、その活動を顕彰した（五月下旬軍通信経由で達した）。

「貴下は三月三十一日米軍の沖縄上陸侵攻以来日夜苛烈なる砲爆撃下にあって決死挺身、皇軍将兵と苦楽を共にし、通信連絡殆ど不可能なるに拘らず、あらゆる方法を講じ、一意決戦報道の大任に当り、その間僚友那覇支局長野村勇三君と共に壮烈なる戦線実相と挙揚なる沖縄県民の真姿を伝えて剰さず、国民をして感奮決起せしめたるところ大なり」

今猶胸を打つ 学徒隊至誠の殉国

沖縄戦を語る上に於て永久に吾人の脳裡から消え去ることのない史実は学徒隊の『殉国物語』であろう。本件に就いてはこれ迄幾多の体験談、手記、記録などが明らかにされて余すところなく、筆を新たにする要なしと思われるので本稿では戦史叢書「沖縄方面陸軍作戦」の関係部分を引用してその概要を記述するに止めたい。

学徒隊編成から終末迄

第三十二軍は沖縄作戦に備えるため、昭和十九年十二月から県当局と中学校生徒の戦力化について協議し、概要次の如く決定した。

① 敵が沖縄に上陸した場合に備えるため中学下級生に対して通信訓練を、女学校上級生に対して看護婦訓練を実施する。

② 学徒通信隊、学徒看護婦隊の動員は、沖縄が戦場となり全県民が動員されるときであり、身分を軍人及び軍属として取扱う。

このようにして昭和二十年一月から男子中学一、二年生中、連性検査に合格した者に通信員教育、女子生徒には看護婦教育が開始された。これらの教育は部隊の通信係将校、病院及び部隊の軍医などによって行われた。師範学校及び中学上級生は学徒隊を編成して各部隊に配属され、戦斗に従事するよう準備された。

昭和二十年三月二十四日沖縄本島に対する米軍の艦砲射撃が開始されるに及んで学徒隊はかねての計画に基いて第一線及び後方関係部隊に配属、戦闘態勢に入った。

四月一日地上戦斗生起するや男子学徒隊は鉄血勤皇隊と命名され、司令部、通信部隊、砲兵隊、工兵隊、飛行場大隊、築城隊、歩兵部隊、遊撃隊などの各種部隊に配属されて伝令、偵察などのほか斬込み隊先導など戦斗員同様の任務に就いた。戦況不利となり兵員の損耗の増加に伴い学徒隊は第一線に投入、斬込み隊、戦車に対する肉薄攻撃など直接戦斗に参加、多大の犠牲者を出した。

女子学生の大部分は看護婦として傷病兵の治療、介護などに献身、困難な状況下にあって能く男子に比して何ら遜色のない奉公の至誠を尽した。戦況不利となるや各病院は六月中旬ごろ相次いで解散、任務を解かれ各自安全地帯を目指して脱出したが、時すでに遅く米軍の進攻急にして行動意に委せず、大半が壕内に於て集団自決又は脱出行の途上で斃れるなど悲惨な運命を辿った。この全貌は「ひめゆりの塔」などの記録もので今猶耳新らしい。

学徒隊関係殉難者概要

（註・数字に若干増減ある見込み）

一、男子学徒

学校名	配属部隊	動員数	死亡者	摘要
師範	第三十二軍司令部 ほか	三八六	二二四	野田貞雄校長ら職員十八名戦死
一中	第五砲兵司令部 ほか	三七一	二二〇	薩野意夫校長ら職員二十名戦死
二中	第六十二師団通信隊 ほか	一四三	一二六	職員七名戦死
三中	独混第四十四旅二歩兵隊 ほか	三六三	三七	職員二名戦死
那覇市立商業	独混第四十四旅通信班 ほか	九九	七二	
水産	電信第三十六聯 ほか	四三	二三	教職員七名戦死
農林	第四十四飛行場大隊	一七三	四二	配属将校（尚謙少尉）一名戦死
工業	第五砲兵司令部 ほか	九四	八五	
私立開南中		八一	七〇	

総員 一、六四三名　死亡者 八八九名　職員死亡者 五五名

一、女子学徒

学校名	配属部隊	動員数	死亡者	摘要
師範	沖縄陸軍病院	一二〇	一〇三	職員七名戦死
一高女	沖縄陸軍病院	二〇〇	六四	職員八名戦死
二高女	第二十四師団 第一野戦病院	六五	二五	職員十一名戦死
三高女	沖縄陸軍病院（分院）	一〇	一	
県立首里高女	第六十二師団野戦病院	八三	四〇	
私立昭和高女	第六十二師団野戦病院	五八	一〇	職員五名戦死
私立積徳高女	第二十四師団 第二野戦病院	二五	六	職員五名戦死

総員 五六一名　死亡者 二四九名　職員死亡者 三六名

奄美地区作戦の概要

一、奄美守備隊の編成

第32軍の創設に伴い、昭和十九年五月二十日奄美守備隊の軍隊区分が下令され、北緯三十度十分以南の吐喝喇、奄美群島の防衛及び徳之島航空基地設定の任務が付与された。

初代隊長は独混第21聯長井上二一大佐（23期）。昭和十九年九月第32軍の全般兵力増強に伴い、独混第64旅が編成され、独混21聯及び22聯が隷下に編入された。22聯長鬼塚義惇大佐（27期）は中支、比島、ソロモンの各戦闘に参加、歴戦の勇士で功四級の所持者でもあった。奄美守備隊の兵力展開状況は別紙。人員およそ一万名。

旅団司令部の編制及び主要職員名は次の通り。

独立混成第六十四旅団

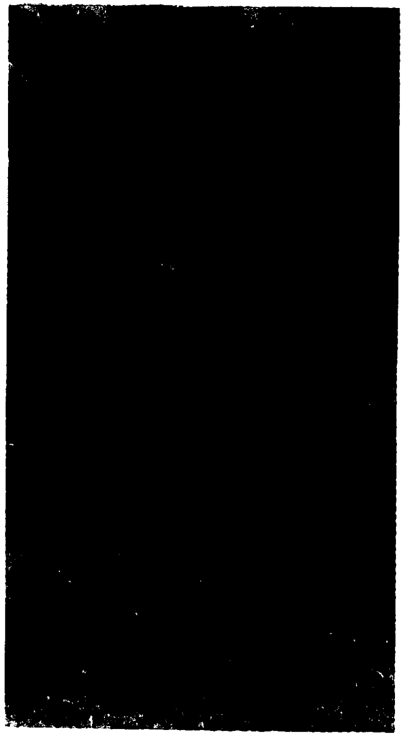
旅団長	少将	高田利貞（26）
司令部		
高級部員	中佐	中溝　猛（37）
作戦主任	大尉	伯野俶一
副　官	大尉	篤　民雄（陸航士56）
〃	中尉	川口　進
〃	少尉	上岡
軍　医	医大尉	豊岡志郎
経　理	主少佐	多田大吉
	主中尉	宮川忠治
兵器（兼任）		伯野俶一
通　信	中尉	古梶
暗　号		
暗号班長	少尉	渡辺正義

一、防衛方針

奄美群島は敵が本土進攻の足掛りとして狙われる公算が大きく、特に航空基地としての価値が高い徳之島は十分警戒を要すとされていた。

守備隊は各離島に兵力分散を余儀なくされたため、決戦兵力に欠けるきらいがあり、徳之島を始め各島嶼では持久が主眼とされた。

徳之島では敵上陸予想地点を平戸野方面（徳之島飛行場正面）に設定、全島を北、南の両地区に分け、北地区隊長に独混21長井上二一大佐、南地区隊長に独混22長鬼塚義惇大佐を充て拠点式洞窟陣地を軸に火網を形成、敵に出血を強要、最後迄飛行場の確保につとめ、萬止むを得ざる場合は大和城の旅司（戦闘司令所）を中心とする複廓陣地に拠って最後の一兵に至る迄抗戦を継続、国軍全般作戦に寄与するを以て防衛作戦の主眼とした。



奄美守備隊司令官（独立混成第六十四旅団長）
高　田　利　貞　少将（26）

明治二十三年鹿児島に生る。大正二年歩兵少尉、第六師団副官、歩兵第四聯隊長、特務機関長、昭和十八年三月陸軍少将、少年飛行兵学校長、十九年七?月独立混成第六十四旅団長、昭和32年12月25日歿。聯合艦隊参謀兼海軍々令部第二部長　高田利種少将は令弟。

第 32 軍

奄美地区守備隊

司令官　独立混成第64旅団長
高田利貞少将（26）

（徳之島地区）
独立混成第六十四旅団司令部
高級部員　中溝　猛中佐（37）
独立混成第二十一聯隊（第三大隊欠）
長　井上二一大佐（23）
独立混成第二十二聯隊（第三大隊欠）
長　鬼塚義惇大佐（27）
第五〇一特設警備工兵隊
第七十五飛行場中隊
長　山懸克己大尉
電信第三十六聯隊の一部（二コ小隊）
陸上勤務第七十一中隊
長　宇梶猛男中尉
徳之島陸軍病院
第三十二野戦貨物廠徳之島出張所
第五野戦航空修理廠第一支廠所属第一独立整備隊

（奄美大島地区）
重砲兵第六聯隊主力
長　末松五郎中佐（30）
奄美大島陸軍病院
海上挺進第二十九戦隊主力
長　山本久徳大尉
船舶工兵第二十六聯隊第三中隊
特設警備第二二〇・二二一・二二二中隊

（沖永良部島）
独立混成第二十一聯隊第三大隊（八中隊の一小隊欠）

（喜界島）
独立混成第二十二聯隊第三大隊

（与論島）
独立混成第二十一聯隊第八中隊の一小隊

（註）奄美地区の陸軍部隊配備の重点は飛行場の所在する徳之島に置かれ、旅団司令部を始め主要部隊が配置された。混成歩兵聯隊は広島、その他の部隊は四国などで編成され、その多くは昭和十九年七月二十日付で第三十二軍に編入されたが、沖縄戦終末近い二十年六月十五日を以て第十六方面軍（司令部福岡）の隷下に入った。

（註二）独立混成第二十一及び二十二聯隊は聯隊本部、大隊三、歩兵砲中隊一、速射砲中隊一、工兵中隊一より成り、大隊は本部、歩兵三コ中隊、機関銃中隊（重機四）、歩兵砲中隊（四一式山砲四）、速射砲中隊（九四式三七ミリ砲四門）から成る。

（註三）重砲兵第六聯隊の主要装備は二十四サンチ榴弾砲四、十五サンチ加農砲二、十サンチ加農砲二、野砲七。編制は聯隊本部と中隊四。

高田旅団長と沖永良部島軍官民代表(昭和19年夏頃)

奄美守備隊司令官（独立混成第64旅団長）高田利貞少将は19年夏沖永良部島を訪れ作戦準備状況を視察した。

(写真) 真中・高田旅団長の左は沖永良部地区隊長（独立混成第21聯隊第３大隊長）吉岡勝大尉、その左・有川中尉。

一、兵力運用の概要

防衛の重点を徳之島に置き、旅司を始め野戦兵力の大半が集中された。この外沖永良部島、喜界島の守備も重視されたが、敵進攻の場合制空制海権の喪失が予想され、兵力の相互支援が期待し得ないのが防衛上の弱点でもあった。

一、海軍部隊の配備

奄美大島の名瀬（？）その他に海上特攻を目的とする震洋艇隊数個と根拠地隊の一部、喜界島（？）に海軍飛行場関係部隊など若干の兵力が配備されたが、二十年四月奄美方面隊（司令官加藤唯男少将、51年殁）に改編統合された。

一、沖縄作戦と守備隊の役割

昭和二十年三月下旬沖縄作戦の開始に伴い徳之島飛行場は九州を発進する陸軍航空隊の中継基地並に不時着、連絡基地としての機能を発揮、又与論島を経由する島伝いによる小舟艇群を以て沖縄地区への武器弾薬補給作戦も実施され、作戦全般に尠からず寄与した。

一、米軍の空襲と被害状況

沖縄作戦開始と同時に米軍は九州地区からする特攻機の攻撃を阻止するため徳之島を始め周辺の島嶼に対する銃爆撃を反復、船舶、地上施設、兵員に甚大な損害を与えた。

一、米軍の企図

米軍は沖縄作戦の第三段階に於て宮古島、久米島、沖大東島、喜界島、徳之島の攻略を予定していたが、四月二十六日ニミッツ元帥の命令で中止（久米島は除く）した。理由は沖縄本島に良好な航空基地の適地が多数あることが判明、それ以外の航空基地を必要としないことにある。

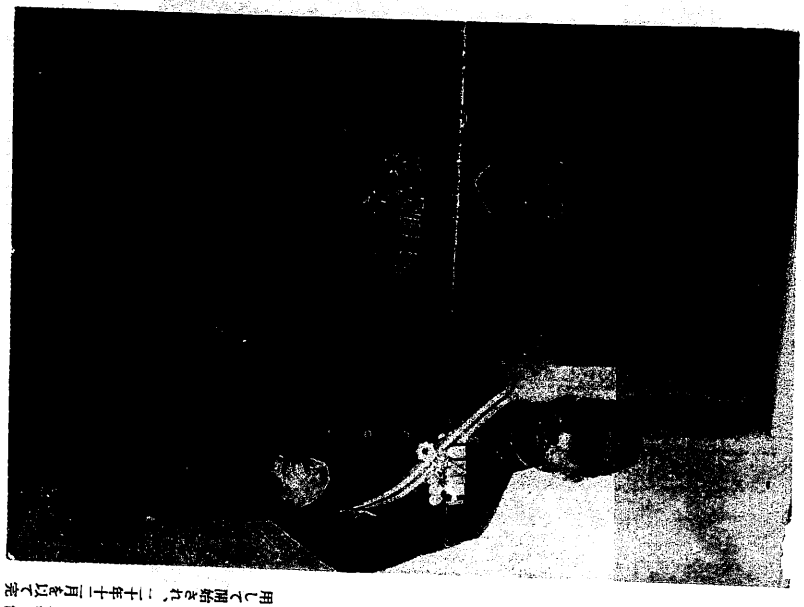
一、甲戦備の下令

昭和二十年五月十九日米軍に新たな上陸企図の動きありとの情報に接し、高田旅団長は奄美全域に対して甲戦備を下令、陸上戦闘を準備せしめたが、数日後（？）状況の好転で解除した。六月以降は敵空挺隊の降下も予想されたので引きつづき警戒を厳にした。

一、終戦前後の状況

独立混成第21聯隊長
井上二一大佐（23）

沖縄戦で戦死した第62師団長、牟田口廉也中将と同期。沖縄作戦中は徳之島に主力を配置して作戦。後第37軍司令官。



徳之島防衛に参加、第49師団長に転補。大正4年歩兵少尉。明治18年大分県生。

明治26年福岡県生。ビルマ、ニューギニア、ビリヤ、支那事変、19年7月独立混成第22聯隊長、一復員

独立混成第22聯隊長
鬼塚時大佐（27）

十月の第一期作戦は十二月の第二期作戦を以て完成。十二月に米軍奄美諸島に上陸。